

## 有峰狛犬8体とその購入者について

五十嶋 一晃

### はじめに

1920（大正9）年、富山県は、電源開発のために有峰村民が所有していた有峰地区一帯の山林・土地を買い占めた。当然、有峰集落はダムの湖底に沈むために解村となる。

有峰の木像狛犬は、古くは1334（建武元）年頃の通称サルの製作年代、もしくは里薬師創建といわれる1390（元中7 / 明德元）年頃から、解村後の1923（大正12）年までの540年～590年の間は、東谷宮社殿後方、間口1間余の見世棚に置かれていた。

解村したあとに残されていた狛犬8体は、消滅したり散逸しないため骨董品に目利きの登山者が1923（大正12）年の夏に一括購入した。

その後、名古屋、長野県の有明、同じく長野県の松本を経て、現在は有峰の入り口・亀谷に所在する富山市大山歴史民俗資料館に常設展示されている。

この経緯のなかで、文学作品の記述は事実なのか創作であるのかを問う問題が起こった。

解散後に狛犬8体を一括購入した人は1人であるはずが、2人の日誌・随筆にそれぞれが購入したという記述がある。そのどちらかを引用している文献が多く、その上、孫引きに執筆者の感想を加えていることから、狛犬8体一括購入者に関しては非常に複雑で混乱した様相を呈している。今回の調査（2017・平成29年）においても、登山史家を含む複数の登山関係者の誤認を確認している。

狛犬8体の購入者についての調査に取りかかったが、調べているうちに有峰狛犬への関心が強まり、数奇な運命をたどった狛犬に愛着を感じて、有峰狛犬全体を俯瞰し、それぞれの深奥を探ってみたいと考えるに至った。

そこで有峰の狛犬を世に広めたのは登山者で、購入した人、保管していた人も登山者、松本市立博物館へ寄贈した人も登山関係者であることから、有峰狛犬と購入当時の登山を結びつけなければ真実が解明できないと考え、まず、狛犬購入者である登山者とその登山および周辺事項を探るために、山岳関連

資料を含めた究明を進めた。

狛犬8体を購入した登山者は日誌に記し、もう一人の購入者であるという登山関係者は随筆に書いていることから、言葉表現手段とした文学作品の特性を理解すること、つまり、小説・随筆・紀行文などの事実と創作についての区分を見極めることと、購入したという2人の盟友関係を知らなければ事実が把握できない。

重ねて、狛犬が有峰を離れてから長野県の有明や松本に置かれていた期間が長いこと。狛犬購入者の山の盟友である2人は、長野県人で各々山案内者組合を設立し山小屋を経営していて登山を職業としている。それらを勘案すると、特に長野県側の文献・資料や山岳関係者の見解を聞きたいという考えが浮かんだ。

したがって有峰狛犬と間接的にかかわっている事項も調べ、有峰狛犬を総合的に究めたいと考えた。

### 【凡例】

- ①引用文について、控えるべき文言が含まれる。この部分は文章の時代性に鑑み校訂は行わないこととする。
- ②登場する人物の敬称は省略する。
- ③有峰狛犬8体を43年間収蔵・展示していた松本市立博物館は、施設は1つではあるが多くの名称が使われている。そこで施設の正しい名称を下記に示す。
  - \*1906（明治39）年 ～ 1948（昭和23）年3月  
明治三十七・八年戦役記念館、松本記念館、松本記念館、松本博物館
  - \*1948（昭和23）年4月～1968（昭和43）年3月  
松本市立博物館
  - \*1968（昭和43）年4月～2005（平成17）年3月  
財団法人日本民俗資料館・松本市立博物館（この間は2つの名称）
  - \*2005（平成17）年4月～現在  
松本市立博物館

なお、上記以外の名称が多く使われている。それらはすべて俗称や誤りである。

筆者が当博物館を示す場合は、期間ごとの表記に関係なくすべて松本市立博物館とする。

## 1. 有峰狛犬 8体の概要

文献・資料から項目ごとに、関係する要点を抽出して概要を述べる。

### (1) 東谷宮に奉獻した「いわれ」

「伊藤孝一の山岳関連新聞記事切抜帖」のうち、1923（大正12）年8月8日付、朝日新聞に掲載されたと推定される記事に、有峰狛犬にかかわる史実の原点が記されているので、その関係部分を引く。

飛越国境有峰部落民に崇敬されてゐた野猪調伏の狗犬（木造）八箇は今回全部山岳研究家伊藤孝一氏の所有に帰することゝなつた

伝説によると……（中略）然るに同地一帯は当時野猪の群棲地であつたため絶えず群猪の襲来を受け折角の農作物を片つ端から荒され到底永住の地とすることが出来ないと知つたが、何分落人の身の何処に便る処もないのでこゝに一策を案じ野猪調伏のために八箇の木造狗犬を作り社殿を建立して只管（ひたすら）野猪の退散を祈願した、ところが忽ちにして野猪は漸時退散して再びその将来に逢ふことがなかつたといふ

それ以来有峰部落の崇敬一方ならず明治維新の頃までは年一回の祭典には孰（いず）れも祖先伝来の甲冑に身を堅め壮麗な儀式のもとに一同社殿地下室に於て礼拝してゐたものである

以上1点のみの紹介であるが、他の記述もこの一文に集約される。つまり「有峰村に猪が群れで襲来し、農作物が荒らされるので、狛犬を造り、社殿を建立してそこに納め、猪の退散を祈願したところ猪は年ごとに減って、再び襲来することがなかった。

明治維新頃までは、村人は年に1回、武者姿で狛犬に詣でた」と要約される。

### (2) 東谷宮社殿に置かれていた状態

有峰の狛犬が、有峰のどこに、どんな状態で置かれていたのだろうか。文献からその模様を読み取ることとする。

1909（明治42）年7月、日本山岳会の辻本満丸は、案内人・佐伯平蔵を伴い、芦峯～才覚地～水須～東笠山～有峰～薬師岳～上ノ岳～有峰～立山温泉～芦峯を踏破した。有峰から薬師岳・上ノ岳往復には平蔵の他に有峰の野口四郎左衛門も案内人として同行している。

この登山は近代登山として薬師岳2登、上ノ岳は初登で、この登山記が日本山岳会機関誌『山岳』第5年第1号（通巻13号）創刊5周年記念号（1910・明治43年3月刊）、日本アルプスの巻に「越中薬師ヶ岳及上ノ岳」と題し、執筆者「工学士 辻本満丸」として発表している。本文24頁、写真6枚、略図1頁、見取図1頁の記録である。

文中、写真6枚のトップに狛犬8体を掲げ、狛犬を特に引き立てており、「有峰」と題して6頁にわたる紹介記事があり、その中の狛犬をこう表している。

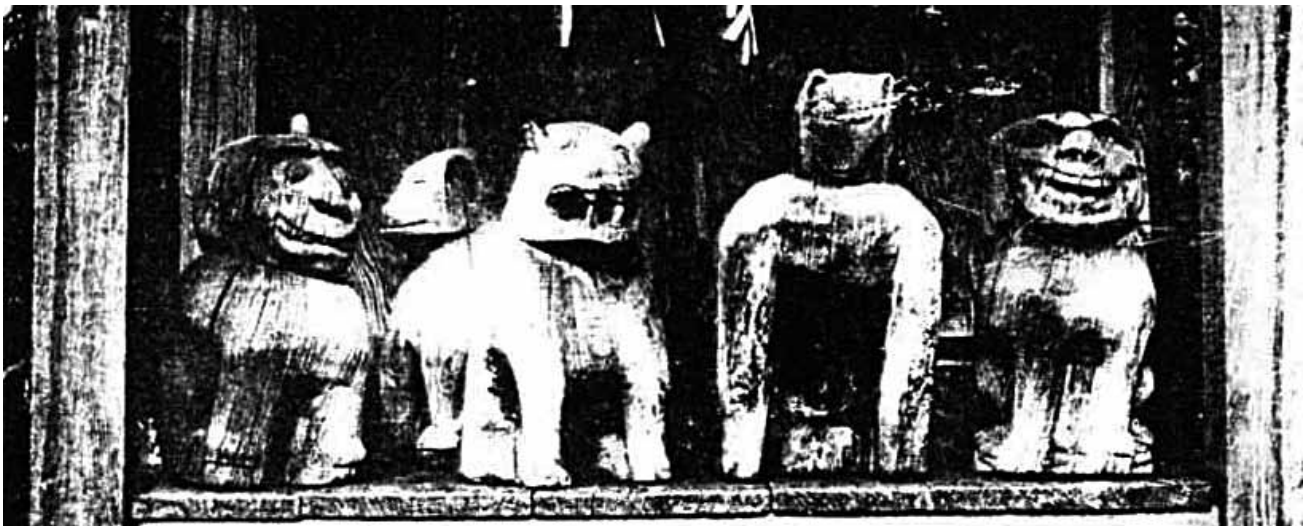


写真1 辻本満丸撮影「有峰村社の狗犬」

村の中央に薬師堂あり、薬師ヶ岳祭神の里宮なり、東谷、西谷二川の合流点間近には一団の森ありて、此処に東谷宮を祀る、即ち有峰村民の氏神なり、拜殿に入るに日露戦役の絵草紙など、羽目に貼り付けられたる外、之と云ふものも無けれど、其後方には間口一間許りの三小社相並びて鎮坐まします、中央なるは東谷の本宮なるべし、左なるは津島宮、右なるは神明宮と扁額（へんがく＝門戸・室内などにかける細長い額）したり、此三社の扉前には、頗（すこぶ）る珍奇異様な狛犬状のものを、一対づゝ安置せり、孰（いず）れも木彫にて、高さは一尺五寸許りに過ぎず、風打雨淋幾星霜をか経たりけん、木目は著しく凹凸を呈し、其或者は甚（はなは）だ破損せり、考古学者に一覧せしめば興味あるものならんと思はれぬ、西谷宮と云ふは、此処より西谷川を三四町も溯りたる左岸の山脚にあり、神社も小さく見るに足るべきものもなし。

とあり、この写真と一文が有峰の狛犬を世に広めた。

小島烏水著『日本アルプス』第2巻に、1910（明治43）年夏の登山記「日本北アルプス縦走記」が載っており、槍ヶ岳～双六岳～鷲羽岳～黒岳（現・水晶岳）～雲ノ平～薬師沢右俣谷（現・薬師沢右俣）を廻り～薬師岳～薬師峠（旧の薬師峠・旧太郎小屋所在地）～有峰を縦走した記録である。その登山記に有峰の狛犬についての写真（辻本満丸氏印画）「越中有峰村の木彫動物（網版）」が載り、その解説を次のように記している。全文を引く。

越中有峰村は、薬師岳の西麓、常願寺川の上流、真川の溪谷を隔て、四面峻嶺の底に介在す、高距は予察四十万分一図に依れば、一、〇八六米突、人家僅（わずか）に十二戸、風俗淳朴にして無智、住民は平氏の遺族と伝称せらるれど、真因は知らず、日本山岳村中の標式的山岳村なり、図は有峰村民の氏神、東谷宮拜殿の後方、間口一間許りの三小社椽上（てんじょう）に安置せる木彫動物にして、高さ一尺五寸、木理は著るしく凹凸し、或部分は破損し、頗（すこぶ）る古雅なり、村民の言ふところに依れば往古野猪等の山林田畑を荒すものを、調伏せんため、猛獣の木像を作りて、社殿に蔵めたるなりと。

とある。この説明で小島烏水は「（有峰村民は）風俗淳朴にして無智」と記されているが、昔、村民は義経流の軍書をひもといていた。400年近くの年月が経つとそれを学ぶことから遠ざかっていったが、現在においても古文書や過去帳、絵草紙、書籍類が残存しており、有峰の先祖は博識であったことを知っておきたい。

他の登山記にも狛犬の記述はあるが、紹介した2点の一文にはほぼ包含される。

なお、現在、「有峰こまいぬの塔」が、有峰森林文化村にある有峰ビジターセンターのそばに建立されている。北陸電力（株）が建立したこの塔は、有峰の狛犬をモチーフとして有峰悠久・有峰追憶・有峰守護の祈りをこめ、有峰湖に捧げる塔として横山善一（富山県南砺市井波）が原型を作成した。高さ10m余、元口径1・5mのトーテムポールを形どったブロンズ製の塔で、有峰の新しいシンボルとして、1987（昭和62）年7月吉日に除幕式が行われている。

### (3) 制作年代

まず、「狛犬製作」と表記されることが圧倒的に多いが、筆者は有峰狛犬は芸術作品ととらえているので、「制作」と表記する。

2003（平成15）年実施の放射性炭素年代測定（AMS法）によると、通称サルは1334年頃（建武の新政・鎌倉期と室町期の間）、通称シシは1452年頃（室町中期）、通称ヌエは1531年頃（室町末期）、通称クマは1814～1879年（江戸末期～明治初期）と測定された。

ただし、修復を行った（株）京都科学仏像修復室では、4対のうち通称〔ヌエ〕については、木取り面の様子や木目を比べると、同質材の木材から制作されたとは思われない」との報告があり、実物を見た限りでは、ヌエの形状は他の7体に比べ異質な印象を受ける。測定の対象は4対の阿形のみであるので、通称ヌエの形状は不明とする。

この測定は制作年代とされているが、ほぼ木材の伐採年代を示している。年代という一定の期間を示してはいるが、必ずしも伐採年代＝制作年代ではない。

代表的な文献・資料の記述は、次のとおり。

【1】「今日想像されてゐる処では作製年代は優に七百年以上」（「伊藤孝一の山岳関連新聞記事切抜

帖」1923・大正12年8月8日の朝日新聞〔推定〕。  
700年前は1229年にあたり、この記事は否定せざるを得ない。

【2】「この像のつくられた時代であるが、専門家の鑑定では江戸中期ごろであろうということであった。……しかし私は感覚的にいえば、ずっと時代はさかのぼるように思われる」(池田三四郎著『木の民芸』1972・昭和47年7月刊)。

専門家は誰で、いつ測定を行ったのか記述がない。放射性炭素年代測定では、江戸中期にはすでに3対が制作されている。著者は「ずっと時代はさかのぼる」と推定しているが、池田三四郎は民芸の専門家であり、さすがに眼力が鋭い。ただし、他の箇所「材質は檜」と記述しているが、檜は通称サルのみである。

【3】「鎌倉期の製作と鑑定された四対の木製の彫りもので、それぞれサル、シシ、クマ、ヌエを象っている」(飯田辰彦著『有峰物語』1995・平成7年3月刊)。

いつ、だれが、どのようにして鑑定したのか記述がない。放射性炭素年代測定では、1対の狛犬ごとに分かれており、それとは異なるのでフィクションであろう。

【4】「この木彫は600～800年前のもの」と云われ」(赤沼淳夫執筆『岳の道標』2001・平成13年1月刊)。

600年前は、通称サルとシシの木材伐採年の中間で、800年前とは到底考えられない。

【5】「鎌倉の古様という人、近世の作品という人などさまざまである」(前田英雄編『有峰の記憶』2009・平成21年8月刊)。

鎌倉時代または近世(安土桃山・江戸時代)の制作を話題の一つに取り上げている。

制作年代については、筆者は放射性炭素年代測定(ほぼ木材伐採年代)+10年以内と推定する。通称サルの伐採年代からは700年近く、クマの測定末年からは140年ぐらいの長い期間からみれば、制作年代は木材伐採年代とほぼ同じであるととらえてよいと考える。

木材伐採年代と彫刻制作年代の関係を、主に福井県の市橋彫刻工房に質すと、そのポイントは「木材の伐採直後は水分を含んでいるので、原則として木材を乾燥させてから木彫の制作に取りかかる。乾

燥させる理由は〔割れ・曲がり・反り〕が入るのを防ぐためである。〔割れ〕などを防止するためには、推定であるが最低5年から10年は乾燥させなければならない」という。関連資料によると、木材に含まれる水分量を「含水率」で表すが、立ち木は150%、乾燥材とされる基準は20%。含水率が最終的に安定する状態は11～12%で、個体差はあるものの生材の状態から含水率11%にするまでは約8年という説がある。

有峰ではあらかじめ狛犬を造るために伐採し、何年も乾燥させたとは考え難いこと。(株)京都科学仏像修復室の報告では、損傷状況は「日割れによる割損が多く見受けられる」とあること。1999(平成11)年の修復前の狛犬の割れの状態、特にクマの卍形の写真を見ると像を2分するぐらいの縦割れがあり、伐採後、まもなく彫ったとも考えられる。これらのことから制作年代は、木材伐採年代に近いとも推測される。一方、伐採年を制作年とする確たる根拠はない。したがって樹木自体が持つ材質によって異なるものの伐採後10年以内に彫ったと推定する。

#### (4) 制作者

文献・資料の記述内容から有峰狛犬の制作者を推測する。

【1】「村民の言ふところに依れば、往古野猪等の山林田畑を荒すものを、調伏せんため、猛獣の木像を作りて、社殿に蔵めたるなり」と。

(小島烏水著『日本アルプス』第2巻 1911・明治44年7月刊)

【2】「執刀者も当時の落武者等が協力して造り上げたものだらうといふ」

(「伊藤孝一の山岳関連新聞記事切抜帖」1923・大正12年8月8日、朝日新聞〔推定〕)

【3】「山の中でつくられた木像ができたころの自然と人間は、」

(池田三四郎著『木の民芸』1972・昭和47年7月刊)

【4】「村人たちは、救いの手を求めた。彼らは、八体の木彫動物像をつくった。おもしろくつくり出そうとか、奇抜さで人を驚かしてやろうとか、そういった現代人の意識とはおよそかけ離れた、自然の霊気というか、息吹というか、それが彼らの手に集まって出来あがったのだ。……。常識を越

えた自由世界の中で、でたらめに作られたように見えながら、実は収穫に害を及ぼすものから、生活を脅かすものから、守ってもらいたい敬けんな村人の祈りがこめられているのだ」(北日本新聞の全面広告 1974・昭和49年8月24日刊)

【5】「昔、有峰の人たちは自らの生活を守るための救い手として8体の木彫動物像を作り、神社に奉獻していた」(北陸電力(株)発行『有峰と常願寺川』1981・昭和56年11月刊)

【6】「村人たちは八個の狛犬をつくり、詞を建てて納め、ひたすら野猪の退散を祈願した」(瓜生卓造著『雪嶺秘話』1982・昭和57年5月刊)

【7】(ヌエについて)「八体の中でこの像が一番凄い。一種の妖気さえ覚える。名もなきアルプスの住人が山中で彫った彫刻の原点である」(池田三四郎著『原点 民藝』1986・昭和61年3月刊)

【8】「往古の有峰村に、山林田畑を荒らす猛獣を調伏するため、江戸中期の村人・山本伝兵衛の作によるといわれる木彫動物が有峰東谷宮の小社に安置されていたと伝えられております」(北陸電力(株)「有峰こまいぬの塔」建立除幕式解説書〔推測〕1987・昭和62年7月記)

【9】「有峰動物木彫も例外ではなく、おそらく住民が見様見真似で作ったのでしょう。一木造りの動物たちは、あるものはお尻の部分に同材の継ぎがあてられ(しかも釘で打ち付けてある)、あるものはウロ(注・樹木の幹にあいた穴・樹洞)をそのまま残し、あるものは安定するよう底に板があてられていました。そして「ヌエ」と呼ばれるものは阿吽の対といわれながら別の木でつくったと思われ、吽形のほうが阿形よりもかなり大きく、作りもかなり大まかなのです。想像ですが吽形は壊れたのか盗まれたのかして失われたので、元あったものを思い起こしながら、のちに別の種類の木を材料に使ったと考えられます。(松本市立博物館ニュース誌『あなたと博物館』No.109 2000・平成12年7月刊)

【10】「四対とも専門的な仏師・彫工による完成的な造形美がみられない。しかし、専門工の作品にない民間芸術的な親しみのある造形といえる。専門的な彫り師の手になるなら干害を防ぐために複数の材を集めて製作したのではないかと考えられる

……2. 狛犬の作者は誰か このことについてはすでにいくつかの仮説から専門的な技術者でないことがわかっても、どのような人が彫ったか未解明である。……作品の製作年代 鎌倉の古様(注・いにしえさま、昔の人)という人、近世の作品という人などさまざまである」(『大山の歴史と民俗』第3号 2000・平成12年2月刊) 前田英雄執筆「有峰の狛犬と懸仏」

【11】「狛犬は有峰にある木材で有峰の人が刻んだと考えられる素朴な姿をし、有峰の人々の願いがこめられた木像である」(前田英雄編『有峰の記憶』2009・平成21年8月) 前田英雄執筆「一、有峰の歴史」

以上、11点取り上げた。他の文献・資料には制作者のことは、ほとんど触れていない。「村人たちが狛犬を作り」=「制作者」とする記述は多いが、断定できる根拠が絶対的ではなく、制作者の名前を特定している【8】の「江戸中期の村人・山本伝兵衛」とする資料はあるが、江戸中期(1690~1780頃)の山本という人は、狛犬の木材伐採年代が1334~1879年頃で500年余の幅があり、江戸中期に彫ったとされる狛犬はない。

したがって、現在のところ制作者は特定できない。今後の研究を待つ。

#### (5) 購入者・購入額

文献上、狛犬8体をまとめて購入した人は、登山の盟友である名古屋の素封家・伊藤孝一と長野県燕ノ小屋(現・燕山荘)の創建者・赤沼千尋の2人が登場する。その上、赤沼が購入したように書かれた赤沼千尋の随筆集『山啄木鳥(やまげら)』を、伊藤孝一が編集し「あとがき」を書いているが、そこには狛犬購入については寸分も触れていない。

調査の過程で明らかになったことは、長野県側では、長野県有明の赤沼千尋の著作随筆集『山啄木鳥(やまげら)』の「有峯悲歌」に記され、『山の天辺』に再録されている文庫と同じで、購入者・赤沼千尋が、1923(大正12)年の夏に有峰に残っていた村民へ焼酎一斗と金一封を献じて狛犬8体を一括して買い取り、赤沼家へ送った、と認識している登山関係者が多いという実態があった。登山史家のなかでも赤沼が購入し、松本市立博物館へ寄贈したと認識し

ている人が多い。『日本山岳会百年史』を編輯した南川金一もその一人で、伊藤孝一が買った根拠を示すと愕然とし、上高地西糸屋の先代・奥原教永も同じく驚いていた。

この状況の中で、赤沼千尋の長男で燕山荘相談役・赤沼淳夫は、2001（平成13）年1月に発行された『岳の道標』（編集者・有明登山案内人組合八十周年記念誌編集委員会）に「有明登山案内人組合の今昔」と題してその活動を回顧している中に、有峰狒犬8体の購入者は、伊藤孝一であることを明記している。

この複雑な経緯を紐解くために、文献・資料が公

になった順、つまり、事象が発生した時点ではなく文献・資料によって明らかになった順にその内容を一覧で示す。購入時期は1923（大正12）年7月末～8月上旬で、購入額はその時点の額を示す。

なお、当一覧の根拠資料として「3の（1）主として狒犬8体購入の一文」に、文献・資料ごとに購入者および狒犬にかかわる主要事項を引用し、筆者のコメントを添えてあるので確認願いたい。

下記一覧の「区分」は、文献・資料の著者、執筆者、作成者のうち、☆＝富山県関係者、◇＝長野県関係者、○＝富山・長野県関係者以外を示す。

表1 有峰狒犬8体の売買に関する概要が紹介された文献・資料の一覧（発行順）

文献・資料名 (発表年月)	区分	購入者	購入額	購入後の搬送先
①伊藤孝一の山岳関連新聞記事切抜帖 (1923・大正12年8月8日)	○	伊藤孝一	300円	—
②赤沼千尋著『山啄木鳥』 (1950・昭和25年10月)	◇	吾々(赤沼)	焼酎一斗と金一封	赤沼の家
③池田三四郎著『木の民芸』 (1972・昭和47年7月)	◇	赤沼千尋	焼酎一斗がめと金一封	赤沼の土蔵
④北日本新聞の全面広告 (1974・昭和49年8月)	☆	赤沼千尋	焼酎一斗と金一封	赤沼の土蔵
⑤赤沼千尋著『山の天辺』（注②の再録） (1975・昭和50年10月)	◇	吾々(赤沼)	焼酎一斗と金一封	赤沼の家
⑥北陸電力(株)編『有峰と常願寺川』 (1981・昭和56年11月)	☆	長野県人	—	—
⑦瓜生卓造著『雪嶺秘話』 (1982・昭和57年5月)	○	伊藤孝一	2000円	—
⑧三井嘉雄著『黎明の北アルプス』 (1983・昭和58年7月)	◇	赤沼千尋	焼酎一斗と金一封	—
⑨大山町編『大山の歴史』 (1990・平成2年3月)	☆	赤沼千尋	—	—
⑩飯田辰彦著『有峰物語』 (1995・平成7年3月)	○	赤沼千尋	焼酎一斗と金一封	赤沼の家
⑪立山博物館図録『山を撮る』 (1998・平成10年7月)	☆	伊藤孝一	—	—
⑫大山町歴史民俗研究会編『大山の歴史と民俗』 (2000・平成12年2月)	☆	伊藤孝一	465円	—
⑬有明登山案内人組合編『岳の道標』 (2001・平成13年1月)	◇	伊藤孝一	金一封と四斗樽	伊藤家
⑭奥原教永著「英男の『水晶山探検記』」 (2002・平成14年5月)	◇	赤沼千尋	焼酎一斗と金一封	松本へ送った

⑮大町山岳博物館編「山岳映画誕生」

(2004・平成16年10月) ◇ 伊藤孝一 相当の高額 —

⑯立山博物館図録『山嶽活寫』

(2005・平成17年3月) ☆ 伊藤孝一 — 名古屋(伊藤宅)

⑰前田英雄編『有峰の記憶』

(2009・平成21年8月) ☆ 伊藤孝一 465円 —

筆者は、1955(昭和30)年に太郎小屋(前身は伊藤孝一が建てた「上ノ岳小屋」、現太郎平小屋)を再建した一人で、以前から伊藤孝一が狛犬8体を高額で購入したと認識していた。山岳雑誌『岳人』の1980(昭和55)年10月号から瓜生卓造の執筆で、伊藤孝一の生涯を「雪嶺秘話」と題して連載し、それを読んでいたことによる。1982(昭和57)年3月号までつづいたが、その2ヶ月後に東京新聞出版局が本として『雪嶺秘話 - 伊藤孝一の生涯 -』を発売した。筆者は太郎小屋のルーツとその創建者を知りたいと常々考えていたので、『岳人』の連載を夢中で読んだ。

この『雪嶺秘話』には、著書の「あとがき」に「赤沼さん御息の淳夫さんにも有難い御協力をいただいた」とあり、著者の瓜生は赤沼淳夫に感謝の言葉を述べている。赤沼淳夫は『岳人』に連載されているストーリーは、父・千尋にかかわることであり、当然読んでいると考えられる。『雪嶺秘話』には狛犬購入者は伊藤孝一であることを明らかにしており、随筆集には父の赤沼千尋が購入したように書かれているが、その赤沼の長男が『雪嶺秘話』発行に協力している。つまり、父が書いた随筆のストーリーは創作であることを表明している訳だ。

また、『岳人』に伊藤孝一の伝記を連載するにあたって、伊藤孝一の4女・伊藤都留子から関係文献・資料のほとんどを借用し、それを情報元としてストーリーを書いている。

今回は随筆集である赤沼千尋著『山啄木鳥』が事実であるとしている文献・資料があるので、創作を事実としていることに大きな問題が生じた。

結論として、狛犬購入の動機・時期・購入者の目利きについては、ほぼ同じであり論を待たないが、「購入者は伊藤孝一」と結論づけられる。

具体的に「伊藤孝一が山行を記録したノート」によると、1923(大正12)年の夏、伊藤孝一が「八個全部を当方に於いて求め度いと話の結果四百六十五

円で買い受けることになって契約した」と記されている日誌を事実と判断する。

なお、465円を現在の価格に換算すると、752,000円にあたる(換算指標を大正11年米1俵10.20円、平成24年米60kg16,501円より求めた)。しかし、換算額75万円余りは、低いように感じられる。瓜生卓造著『雪嶺秘話』では2,000円とあり、この部分は創作ではあるが換算額は320万円余となり、換算値から見れば瓜生の方が妥当のように思われる。

(6) 保管場所・展示会場

参考文献・資料では、制作初期に「畑」に置いたという推測はあるが、その他の文献・資料の記述はほぼ同じであるので逐一取り上げないが、次のように結論づけられる。

【1】1334(建武元)年~1923(大正12)年夏

制作後、有峰東谷宮社殿の見世棚に備え置き、1923(大正12)年の夏に伊藤孝一が一括購入。ただし、筆者は通称シシとヌエは短期間「畑」にかかしのようにならされていたと推測する(「補遺1」参照)。

【2】1923(大正12)年夏~1944(昭和19)年4月

伊藤孝一は有峰で購入したあと、名古屋の自宅へ持ち帰り、蔵の地下室で私蔵。

伊藤家は1944(昭和19)年4月、長野県松本へ疎開するため、狛犬8体を長野県有明の赤沼家に預ける。

【3】1944(昭和19)年4月~1957(昭和32)年7月

戦中・戦後は赤沼家の土蔵(納屋)の2階で保管。1951(昭和26)年10月、伊藤孝一は、狛犬と山のフィルムを赤沼家に預けたまま東京三鷹に移り住み、1954(昭和29)年4月死去。赤沼千尋(住所・松本市上土町〔松本市立博物館の記録])は、松本市立博物館へ寄贈(「補遺2」参照)。

【4】1957(昭和32)年7月~2000(平成12)年7月

松本市立博物館に収蔵・常設展示。2000(平成

12) 年7月22日、松本市長から大山町長へ「贈呈 目録 民俗資料 有峰狛犬8体」が渡され、狛犬8体の無償贈与が実現。

【5】2000（平成12）年7月～現在

富山市大山歴史民俗資料館で常設展示。

**補遺1** - 狛犬は「[かかし]のように畑に置かれていた」について

推測ではあるが、一つの提言を試みたい。狛犬の置き場所として、松本市立博物館学芸員・内山美紀はニュース誌『あなたと博物館』に「想像の域を出ませんが、底面の痛みのはげしかった動物木彫は最初は社殿のなかに置かれていたのではなく、野猪の調伏のためかかしのように畑に置かれていたのかもしれないのです」と推測している。

有峰狛犬通称サルの放射性炭素年代測定は、1334（建武元）年。サルの製作年代に即東谷宮が創建されたとは考え難いこと。『大山町史』（1964・昭和39年11月刊）では、「里の薬師」創建は、1390（元中7 / 明德元）年6月で、有峰の創始とされていること。これらによって東谷宮（有峰村民の氏神）と里宮（薬師堂・薬師ヶ岳祭神）の創建とは同じ頃であると推定すれば、少なくとも1334年から1390年は、狛犬通称サルは「畑に置かれていた」と推測できる。

しかし、1999（平成11）年の狛犬8体の修復では、立脚の安定のため像底部をエポキシ樹脂で充填・補強したのは、通称シシの阿像であり、支持台を作成したのはヌエの阿像・吽像で、通称サルではない。そこで少なくともシシやヌエは制作からいくらかの間、あるいは社殿から一時、畑に置かれたと推定した。

この説を進めるにあたって、有峰の創始について疑問を持った。前田英雄は「この数値（通称サルの年代測定）から有峰村に鎌倉時代から東谷宮が祀られ、宮の守護神として狛犬が奉獻されていたことになる。今まで有峰の創始は室町時代とされてきたが、大幅に時代を遡り鎌倉時代とすることができるようになった」（『有峰の記憶』より）とかなり確信のある表現である。

ただし、「鎌倉時代から東谷宮が祀られ」「大幅に時代を遡り鎌倉時代」と記されているが、里薬師創建の1390年から56年遡っているが、鎌倉時代の末年は元弘3 / 正慶2（1333）年、鎌倉幕府が滅亡す

るまでを一般的には鎌倉時代とし、1333年6月から「建武の新政」で、鎌倉時代と室町時代の狭間に入る年であること。サルの放射性炭素年代測定では「1334年あるいは1336年（室町時代の初年）」であることから、サルの測定年代はむしろ室町初期に属し、到底、鎌倉時代に遡るとはいえない。したがって「鎌倉時代」に東谷宮が祀られているとは考えられない。

**補遺2** - 赤沼千尋が松本市立博物館へ狛犬8体の寄贈について

1957（昭和32）年7月5日より11日まで、松本市立博物館において「松本市制施行五十周年記念 山岳展」が開催され、そこへ赤沼千尋は有峰狛犬8体を出展した。それを機に7月6日に松本市立博物館へ寄贈している。

赤沼が松本市立博物館へ寄贈した動機については、飯田辰彦著『有峰物語』（1995・平成7年3月刊）に日本民俗資料館（＝松本市立博物館）の前館長・田中磐は、

当時関係者から伝え聞いた話として、赤沼が有峰の狛犬を資料館に預けることになった経緯についても、こう語ってくれた。「信仰の対象として、有峰の人びとがずっと大切にしてきたものであることを、赤沼さんはよく承知していました。そうした神聖で貴重なものは、私物化するよりも、しかるべきところに預かってもらうほうがいい、と彼は考えたんですね。」そこで赤沼は、日本を代表する山岳都市・松本の、しかも歴史と権威ある同資料館に寄贈を申しだたというわけだ。ここなら永久保存が可能であり、狛犬にとってもひとつの供養になると、当時の赤沼は考えたらしい。

と記されている。『有峰物語』以外に、赤沼が松本市立博物館へ寄贈した動機を書いている文献・資料は見当たらない。

筆者は単純に、狛犬8体を購入した伊藤孝一が、購入時に掲載された新聞記事に「（伊藤氏は）博物館か又は菩提寺へ納める意向である」とあり、赤沼はその意志を十分承知しており、その意向を顕現したと捉えている。

(7) 大山へ帰郷、文化財指定

狛犬8体は松本市立博物館から大山町へ帰る。つ



まり「ふるさとへ帰った」経緯をたどる。以下、発生順に列記する。

【1】1974（昭和49）年8月24日付、北日本新聞に2頁にわたって【全面広告】が掲載されており、それには狛犬8体の帰還を願う思いが込められた文章が並んでいる。

題目は《ふるさと有峰を離れて五十余年。八匹の狛犬たちはいま何を思う》。

見出しとして

《奇怪な八体の木彫動物像だがかつての有峰人たちの守り神》

《薬師岳を神とあがめた心と往時をしのぶ唯一のよすが》

《ふるさとを遠く離れた松本で手厚く保護されてはいるが・・・》

《自然を恐れぬ人間たちに有峰の風が教えるものは》

とあり、本文の帰還運動にかかわる一部を拾ってみる。

八体の木彫動物像を守り神として奉った素朴な信仰を、何らかの形にとどめたいと、その写真が飾られている（注・有峰記念館）。残念なことには、実物は、有峰にも、県内にもない。ふと、有峰記念館をはじめとする各施設を管理する北電産業の海野祐三さん（六三）の言葉がよみがえる。「有峰記念館にこそ、実物の狛犬がほしいんですよ。有峰の往時をしのぶにふさわしい、あれ以上のものはありません。自然と村人の心とが、ピッタリ結びついたかたちなのです。

と関係者の心のうちを紹介している。そして

これまでも、何らかの形で、それをふるさと有峰へ戻せないものかという声が起こったが、立ち消えになっている。

ともどかしい気持を表し、最後の一文は、

ふと、現実に戻った私たちは、彼らを有峰の大自然に住まわせえないことのおろかさ、安住の地を失なわせたことの淋しさを背に有峰平をおりはじめていた。

と結んでいる。

この全面広告が、帰還運動を公にした最初であろう。東京、大阪、金沢、富山、高岡に本社のある企業を合わせて19社が社名広告、それに

愛知県私立大学広報委員会が賛助広告を載せている。ところが有峰湖の所有者・北陸電力の広告がない。「協賛」として、富山県、富山県市長会、富山県町村会、富山県商工会議所連合会が列記されている。狛犬の帰還を一番強く願う故郷の大山町は、単独で協賛するくらいの意気込みが必要ではなかろうか。この運動には大山町と北陸電力(株)の名が欲しいところである。

【2】1994（平成6）年、松本市立博物館へ大勢の狛犬見学者が訪れる。この現象は、山岳雑誌『山と溪谷』に飯田辰彦執筆「有峰物語」と題する記事が、1993（平成5）年10月～翌年2月号までの6回掲載されたことによる。なお、執筆者が連載記事に大幅な加筆を施し1995（平成7）年3月、『有峰物語－「山の時間」を生きる日本人』と題する本が山と溪谷社から発行された。これによって有峰狛犬は全国の登山愛好者に知れ渡った。

【3】1997（平成9）年11月、松本市立博物館・田口勝館長へ大山町関係者の表敬訪問。

【4】1998（平成10）年7月25日～8月30日、立山博物館特別企画展「山を撮る」が開催され、会期中は松本市立博物館から狛犬8体を借用して展示された。ただし、この展示は大山町の返還運動とは全くかわりがない。長野県側では帰還運動を行っているのは立山博物館であるとしている人がいることと、立山山麓で展示された実績として列記した。

【5】1998（平成10）年10月、本格的返還交渉に入る。

【6】1999（平成11）年2月、大山町教育委員会が、大山町歴史民俗資料館において6月12日から特別展を企画し、松本市立博物館所蔵の有峰狛犬8体借用の申請をする。松本市立博物館では「狛犬が長期の常設展示に耐える修復を施すこと」を条件として貸し出しを許可する。修復内容については、「1の（9）修復・鑑定・測定」で述べる。

【7】1999（平成11）年6月12日～2001年5月30日の2カ年間、有峰大規模林道の開通や2000年とやま国体の開催を契機に、松本市立博物館から狛犬8体を大山町が借用し、大山町歴史民俗資料館において第15回特別展「よみがえる有峰の狛犬と歴史・文化」展を開催し狛犬を展示した。

【8】2000（平成12）年5月23日、松本市役所へ飯大山町長、山元総務課長が有賀正松本市長を訪問

し、松本市長の「20世紀に起きたことは、20世紀中に完結させるべきであり、狛犬を故郷にお返しする」という英断のもとで返還が確認された。

【9】2000（平成12）年7月1日～7月20日、松本市立博物館・日本民俗資料館2階展示室において「狛犬さよなら展」が開催される。「素朴な祈りのかたち -有峰の狛犬。故郷にかえる-」と題し、主催は松本市・松本市教育委員会・財団法人松本市教育文化振興財団による。7月1日には、松本市関係者30数名と、もらい受ける大山町の町長、議会議長など関係者20数名が出向き、賑々しく「お別れ会」が挙行された。

【10】2000（平成12）年7月22日、大山町文化会館で狛犬贈呈式が挙行され、財団法人松本市教育文化振興財団理事長・松本市長の有賀正から大山町長・飯幸雄へ「贈呈目録 民俗資料 有峰狛犬8体」が渡された。これを以て狛犬8体の無償贈与が実現した。

【11】2000（平成12）年7月23日から8月20日まで、大山町文化会館において「77年ぶり帰郷 有峰の狛犬記念特別展」を開催。

【12】2000（平成12）年8月21日以降、大山町歴史民俗資料館（現・富山市大山歴史民俗資料館）にて常設展示。

【13】大山町は「有峰狛犬（4対8体）」を2000（平成12）年9月19日付、有形民俗文化財（現・富山市指定）に指定。

#### (8) 狛犬ごとの特性

主として富山市大山歴史民俗資料館が2005（平成17）年11月、再開館時に作成した図録『大山の先人を偲ぶ -大山歴史民俗資料館のあらまし』、および平成22年度企画展図録『さまざまな狛犬の姿と形』より引いた。「年」は放射性炭素年代測定（AMS法）による制作年代（ほぼ木材伐採年代）を示し、資料の時代区分は、「初期・中期・末期」の3区分と「前期・後期」の2区分が混在した表記であったが、3区分に統一した。

なお、写真は1999（平成11）年4～5月に、修復する前のものである。



写真2 通称サルスの修復前の一対

富山市大山歴史民俗資料館 提供

通称サルとも言われている。吽形の像の頭部には、一角を嵌込（はめこ）んだほぞ穴が残っている。この像は左胸部がはく落し、左脇部にも節の抜けた穴がみられる。シシ・サルともに守護神としての恐い面想をしており、伝統的な古様（いにしえさま・過ぎ去った時の様子）を残しているようである。

〔年代〕1334年頃（鎌倉末期）〔材質〕ヒノキ科  
〔つくり〕一木造 〔特徴〕垂れ耳 獅子鼻 たて髪あり 尾あり 角あり（剥落、ほぞ穴残る）表面こげている  
〔高さ×幅×奥行（cm）〕阿像47×20×30 吽像44×16×33

注：年代を「鎌倉末期」としているが、「室町初期」とすべき。「(6) 保管場所・展示会場」の「補遺1の後半〔この説を進めるにあたって、……〕」を参照。



写真3 通称シシの修復前の一対

富山市大山歴史民俗資料館 提供

通称シシと言われている。社殿の見世棚の最前部におかれていた（明治43年の写真による）せいか風触が一番激しく木目がきわだって出ている。吽形の

像は一角を有し狛犬と判別される。

1452年頃(室町中期) 軟松類 一木造 垂れ耳  
簡略化 獅子鼻 たて髪表現あり 尾あり 角あり  
頭部大きく、丸みを帯びる 阿像50×24×27  
吽像50×24×25



写真4 通称ヌエの修復前的一对  
富山市大山歴史民俗資料館 提供

通称は「ヌエ」。何故ヌエと名付けられたか不明、怪獣の意味か。一番抽象的な彫りで、とくに小さな像の脚部にその傾向がみられ、この像は後に彫られたと思う。これもたてがみが無い。見方によって狐、または狼にも見える。

1531年頃(室町末期・戦国期) 軟松類 一木造  
立て耳 鼻なし たて髪なし 尾なし 頭部小さい  
角なし 阿吽で大きさ異なる狐、狼を表現か  
阿像48×26×26 吽像54×28×30

注：他の資料では、「顔がフクロウ、胴がトラ、尾がヘビという架空の動物」と記されているものあり。「小さな像(阿像)は後に彫られた」とあり、測定は阿像であるので、大きな像(吽像)の測定年代は不明とすべき。



写真5 通称クマの修復前的一对  
富山市大山歴史民俗資料館 提供

クマと呼んでいる。たてがみが彫られていない。また角の痕跡もないが、阿吽の対をなしている。像は木の芯を中心において彫り面取りもみられ彫刻的に最も整うところから対のうち最も新しいようだ。

1814~1879年頃(江戸末期~明治初期) モクレン属 一木造 立て耳 鼻穴を表現 たて髪なし 尾なし 角なし 阿吽で大きさ異なる全体に丸みを帯びる 阿像54×27×35 吽像49×24×28

#### (9) 修復・鑑定・測定

この項は、富山市大山歴史民俗資料館および松本市立博物館の資料を要約した。

【1】修復業務 1999(平成11)年4月26日~5月27日

修復業務は、(株)京都科学、その結果は同社仏像修復室作成「松本市立博物館蔵 有峰動物木彫り修理報告書」による。

#### 1 品質構造

8軀とも木造、一木造。サル・シシ・クマは「同質材の材木から制作されたと思われる」。ヌエは「同質材の材木」から制作されたとは思われない。

#### 2 損傷状況

全体に埃等が付着しており、日割れによる割損が多く見受けられる。地付き等に虫蝕孔が見られる。中には、胸部や左右の前足、背面にも虫蝕孔が見られたり、割損したりして立脚が安定しないものがある。側面や胸部にウロ(注・樹木の幹にあいた穴・樹洞)が認められ、材を補ったと思われる跡が残っているものもある。

#### 3 修理方針

本像は地方性豊かな素朴な彫刻であるが、日割れ、虫害等のために形状が損なわれつつある。今回の修理では、材質補強(樹脂含浸)、虫蝕孔の充填、日割れの充填等を行って、尊容の保持に努める。

#### 4 修理内容(①~⑧は松本市立博物館の資料による)

- ①清掃による表面の埃・汚れの除去：8体すべて
- ②像全体にロイシール4%溶液を塗布含浸(材質補強のため)：8体すべて
- ③虫蝕穴にアルタイン溶液に砥ノ粉を混合した

ものを充填：8体すべて

④日割れにエポキシ樹脂を充填、表面を段落ちさせて整える：8体すべて

⑤像底部をエポキシ樹脂で充填・補強（立脚の安定のため）：シシの阿像

⑥「③④⑤の充填箇所」をアクリル絵の具で補彩：8体すべて

⑦支持台作成（立脚の安定のため）：ヌエの阿像・吽像

⑧像底後補部材を除去、釘穴跡へエポキシ樹脂を充填・補彩：クマ吽像

費用は資料燻蒸運搬費を含めて3,591,000円。大山町支払。

## 【2】木材の放射性炭素年代測定（AMS法＝加速器質量分析法）

2002（平成14）年11月22日～2003（平成15）年8月5日

測定業務は（株）中部日本鋳業研究所（富山県高岡市・現社名株式会社アーキジオ）。分析にあたっては、（株）加速器分析研究所の協力を得た。

「有峰狛犬製作年代調査業務の分析結果報告書」（作成・（株）中部日本鋳業研究所考古事業部埋蔵文化財調査室）を要約すると次のとおり。なお、題目「製作年代」は、ほぼ樹木の伐採年代を示し、試料は、狛犬の外観に影響のない個所から採集している。

\*業務内容：木材の放射性炭素年代測定（AMS法＝加速器質量分析法）

\*採取した木材：4対の阿像

\*測定方法（省略）

\*測定・分析結果

通称「サル」の推定年代は、1334（建武元）年あるいは1336（延元元／建武3）年

通称「シシ」の推定年代は、1452（享徳元）年

通称「ヌエ」の推定年代は、1531（享禄4）年あるいは1545（天文14）年

通称「クマ」の推定候補年代は、1814年、1832年、1879年、1915年であるが、歴史的要因によって年代を特定すると、1814（文化11）年～1879（明治12）年

大山町教育委員会の判断により測定は4対とも阿像のみとしたが、当項「【1】1 品質構造」の報告書に記されているように4対のうち通称ヌ

エについては、同質材の材木から制作されたとは思われない」との指摘があり、少なくとも「ヌエ」については吽像の追加測定が必要であろう。その結果によっては制作者を特定するための手がかりになるかも知れない。

## 【3】旧有峰村社の木製狛犬等の樹種識別（精密検査） 2003（平成15）年8月

業務：富山県林業技術センター

2003（平成15）年12月17日付「試験成績書」を要約すると次のとおり。

2003（平成15）年8月11日、木製狛犬等8体から試料を採取。試料の劣化が激しかったので、試験方法に工夫をこらし、その結果は次のとおり。

通称「サル」は、ヒノキ科（ヒノキ属、アスナロ属）の一種。かすかに、ヒノキあるいはアスナロ様の香りがある。通称「シシ」は軟松類。通称「ヌエ」は軟松類。通称「クマ」はモクレン属の一種。

## 2. 狛犬購入者について

狛犬8体の購入者である伊藤孝一の理解を深めるため、伊藤の登山を中心にその盟友と狛犬を結ぶ絆に触れる。

まず、伊藤が狛犬8体を一括して購入した動機を、端的にここに述べておきたい。有峰村が湖底に沈むので、それに伴う狛犬8体の散逸や消滅を防ぐために購入したことはすでに述べた。ただし、それは一般論であって、もっと奥深い動機があったのではなかろうか。

伊藤の狛犬購入の“こころ”は、8体の像を歴史的・民俗的な文化財の守護とか美術品として価値の高いものの保護という見方以上に、信仰の対象として尊崇・畏怖されるもの、つまり、狛犬を神仏として崇めたいという気持ちが勝っていたのではなかろうか、と筆者はとらえている。

その証の一つとして、「伊藤孝一の山岳関連新聞記事切抜帖」の記事に「伊藤氏は近々上京して鑑定を乞ふた後博物館か又は菩提寺へ納める意向である」とあり、菩提寺に納めるという心境は、まさに神仏を意識した表れであろう。

### (1)「雪の薬師、槍越え」の計画と成就

伊藤孝一は1923（大正12）年の11月下旬から翌年の4月下旬にかけて、積雪期の薬師岳と黒部源流域

の山々の初登頂、黒部川の源流と上廊下の一部・雲ノ平の初踏破、槍ヶ岳への初縦走を目指し、その山行をくまなく映像に収めるという破天荒な計画を立てる。それを実現するために、私費20万円(大正11年、米1俵10.20円、平成29年自主流通米60kg15,075円の米価基準換算で2.956億円≒3億円)を投じた準備作業がはじまる。この登山に費やした費用は、撮影を含め40万円という。日本の近代登山史上類例のない登山で、おそらく世界の登山界においても例をみない登山であろう。営利ではなく登山とその撮影のために、一個人が空前絶後の資金を投下するが、それは還元されるものではない。

1923(大正12)年3月、雪の雄山と針ノ木峠越えを終えた伊藤孝一一行は、薬師岳の山麓・有峰集落において、有峰の雪解けから周到な登山準備を開始した。伊藤孝一に、信州大町對山館の主人・百瀬慎太郎(信州側からのサポート隊)、燕の小屋(現・燕山荘)の主人・赤沼千尋(冬の上ノ岳、薬師岳の初登頂と信州側のサポート隊)が参加し、東海シネマ商会の映写技師・勝野銈四郎、直吉兄弟に、針ノ木峠越えに同行した奥村吉松が参加し、大勢の案内人・作業員が伴う登山であった。

有峰の狛犬を購入することになったのは、この「雪の薬師、槍越え」のために有峰における準備作業中の7月下旬から8月上旬の間であり、伊藤孝一は日誌に、赤沼千尋は随筆に各々が狛犬を購入したように書いている。

伊藤孝一が雪の針ノ木峠と雪の北アルプスの最深部踏破を計画したのは、より困難を求めるアルピニズムの実践というよりも、河東碧梧桐らの1915(大正4)年8月に朝日新聞に載った「日本アルプスの縦走」と題する新聞記事と、9月に入り「雪線踏破七日記程」と題し、河東碧梧桐の名を以て「日本及日本人」に掲載された記事を読み、それに大変感銘を受けたことによる。この登山記は後に『日本アルプス縦断記』(1917・大正6年7月刊)と題する本に収載された。

伊藤孝一は著者の一人である河東碧梧桐の針ノ木峠から槍ヶ岳への峰々を思う心情や、非常に奥深い観察眼の表現に感銘したのではなかろうか。伊藤は記事を読んだときの心境の発露を北アルプス最深部の黒部源流域に求めた。

伊藤孝一を魅了した河東碧梧桐の登山と紀行文に

ついて若干触れなければならない。河東碧梧桐は正岡子規を師とし、子規の最期をみとっている師弟関係であった。伊予松山の出身で松山中学の同級生・高浜虚子とともに「子規門下の二人」と言われていた。

碧梧桐の登山は、1913(大正2)年7月下旬、西尾長太郎を案内に、未踏ルートであった黒薙温泉から黒部川の支流・猫又谷を遡り、清水平を経て白馬岳登頂の山行があり、登山史家の山崎安治は、『新稿 日本登山史』にこの記録を「日本山岳会に所属しない文学者の登山として異色のもので、この方面からの白馬岳登頂は最初の記録とみられている」と記している。つまり、碧梧桐の登山は文学者一遍の山登りではなく、初踏破を目指す探検的な登山であったが、日本山岳会には所属していなかった。そのためであろうか『日本アルプス縦断記』は日本山岳会機関誌『山岳』第11年第3号(1917・大正6年9月刊)の図書紹介でH・T(武田久吉)が酷評している。武田は英国の外交官で登山家サー・アーネスト・サトウの次男、日本山岳会第6代会長、日本山岳協会初代会長など、日本の登山界に多大な貢献を果たしている。その武田が批判する一文に「いかにも此の衆のやりそうなこと」「碧梧桐氏の『朦朧地図』」「目をわるくしたい人でなければ読むべからず」「本書はあつても無用、なければこれに越したことなしといふ、際物的書籍」など大正のはじめという時代的背景もあろうが差別と侮蔑の言葉が並んでおり、文のはじまりから終わりまで批判のみである。

ところが武田以外の人の評価は極めてよい。吉田精一著『随筆とは何か』(1990・平成2年2月刊)に「山の随筆には、小島烏水、河東碧梧桐、田部重治、冠松次郎、深田久弥、浦松佐美太郎らの山男の作品がある。山に登らなくともこういう人の本を読んで、登ったような気持ちになれば安上がりというもの」とあり、碧梧桐の作品も挙げている。

『日本百名山』の著者・深田久弥は山の本で最初に買ったのは『日本アルプス縦断記』であり、瓜生卓造の『日本山岳文学史』や小林義正の『続・山と書物』は、碧梧桐の著書を高く評価しており、本もかなり読まれている。筆者は1922(大正11)年7月に発行された12版を参考文献にしているが、他に『河東碧梧桐全集』全18巻(2001~2009)が発行され、

その10巻（2006・平成18年7月刊）に登山記が載っており現在においても読まれている。したがって武田の書評の感覚は、大正期の登山界における寡頭制を表すものではなかろうか。「日本山岳会に所属していない文学者の登山」が酷評の要因であるならば、武田こそ論難されるべきであろう。

伊藤孝一の近代登山史上類例がない登山とは、雪山1シーズンの登山のために3ヶ所の山小屋を建て、多くの案内・作業員を雇うなど、未踏のコースをもっとも安全・確実に踏破する登山を実践したことである。そのために莫大な資金を費やしたことを指す。

山小屋の建設と雪山の案内を芦峠の人たちに依存することとなる。村の総代であり、立山案内人組合の取りまとめの任にあっていた福泉坊の佐伯静は、伊藤の依頼によって、案内人・作業員の手配のみではなく山小屋建設の認可手続にも尽力し、静を窓口とした伊藤の破格な資金供与によって、芦峠全体が相当潤った。

当初、目的を叶える要所である真川、上ノ岳頂上付近、薬師沢出合、黒部乗越の4ヶ所の山小屋建設を予定した。伊藤自身がすべての小屋を設計し、山小屋建設の許可申請をする。薬師沢出合が承認されなかったものの、あとの3ヶ所は許可がおりる。

真川小屋のたたずまいは山小屋というより、むしろ旅館であった、と他のパーティーの登山記に書かれている。3ヶ所の山小屋の建設や事務上の連絡のために、有峰村民が離村した後でも有峰に残っていた岩段才次郎宅を連絡所としたが、仕事は相当繁忙であり、まるで伊藤孝一が経営している伊藤殖産の有峰出張所のようなであったという。そのために伊藤殖産の支配人・堀田銀一夫妻は有峰に常駐した。芦峠衆30人前後の人たちは、炭を焼き、畑を耕し、鶏を飼う。山案内人の妻たち4人までが動員されて炊事や洗濯などの家事の仕事や、野菜を冬用として蓄える仕事もこなした。

そして厳冬期の上ノ岳初登頂および鉢伏山越え薬師岳の初登頂、春の奥黒部初踏破と槍ヶ岳への初縦走は、計画どおり事故もなく成就した。3つの山小屋は、登山終了後、富山営林署へ譲渡している。

## (2) 伊藤登山の流儀

名古屋の素封家・伊藤孝一は、1923（大正12）年

3月、芦峠案内衆の先導によって積雪期の雄山登頂と針ノ木峠を越えた。この山行は当初信州側から、大町の案内人13人を伴って入山している。支援隊の芦峠案内衆8人は、伊藤一行を迎えるために立山温泉から吹雪の立山連峰を越え、平の小屋で待機した。伊藤一行は予定を過ぎて来ない。そこで黒部川を渡り、針ノ木峠を越えて一行が停滞していた大沢小屋に達する。この行動によって伊藤は芦峠案内衆に全幅の信頼をおくようになった。翌日、大町の案内人は全員下山してしまった。伊藤一行と芦峠衆は一旦大町へ下山し、富山側から入山して「雪の立山、針ノ木越え」とその撮影に成功した。一行のうち大町登山案内者組合を設立した百瀬慎太郎、有明口登山案内者組合を設立した赤沼千尋は、信州の案内人を伴わないので相当心残りがあったことだろう。『岳の道標』の「有明登山案内人組合の今昔」の中で、赤沼淳夫（赤沼千尋の長男）は、立山温泉を基地として針ノ木峠を越えるにあたって「ガイドの選出について百瀬さんは大町を、伊藤さんは立山のガイドを主張して譲らず、激論の末、立山のベテランガイド佐伯嘉左衛門や佐伯亀蔵らが参加する事で立山のガイドに決り、総勢二十名以上の大部隊となった」とある。

この山行を撮影したフィルムを宮内省に献上するとともに、「雪の日本アルプス」と題する活動写真大会が東京帝国大学や名古屋、大阪などで盛大に上映された。2000年代（平成12年～）に立山博物館によって編集された「雪の立山、針ノ木越え」と「雪の薬師、槍越え」と題するフィルムは、日本に現存する雪山登山の映像としては最古のものである。

伊藤孝一の登山のうち、もっとも成果の上があった「雪の薬師、槍越え」登山を俯瞰すると、伊藤の雪山登山とその撮影は、もっとも安全に、もっとも確実に目的を成就するものであった。そのために天候が悪ければ行動しない。登山期間は休養日を含め十分な日程を設ける。必要以上と思われる案内人や作業員を長期間雇い、その上炊事を賄う人々やアプローチの山道では、ラッセルや荷担ぎを担う臨時の作業員まで雇う。登山の行程中に案内人が狩猟でカモシカを獲り、罫でウサギや霞網で小鳥を捕獲する日程まで組み込む。案内人ともどもスキーの練習は欠かさない。山中だから粗食や不自由さに耐えることは考えない。おいしい食事と毎日好きな酒をたし

なむ。快適な睡眠、寒さや荒天に脅かされぬ安心と居心地のよさが不可欠だ。そのために事前に山小屋を3軒も建てる。それに最新の登山用具や装備を整える。山岳映画撮影用の新鋭機材や高画質フィルムを準備し、それを惜しみなく使う、という登山であった。

このような伊藤の山登りは登山であろうか、登山ではあるがアルピニズムとは異質ではなからうか、という意見が当時ささやかれていた。つまり、アルピニズムとの相克である。したがって伊藤の終局の登山である「冬の薬師、槍越え」は、多額の資金によるもので、登山という領域からはずれている、という見解があった。

藤田信道（早大山岳部出身）は、自著『積雪期登山』において次のように述べている。

「金力を以てすれば、如何なる山も、何時の時期でも解決して見せる！ こうした動きが、彼にはあつたかも知れぬ。……金持が山に行くのは良い。だが、都の赤い灯の戯れに疲れて、山に来て大名旅行することを以て得々としているように思われた」とある。藤田の誤認もあるが、具体的な見聞をもとに、かなり辛辣な見解を5頁にわたって述べている。

一方、瓜生卓造は『山嶺秘話』の「あとがき」に「こうゆう画期的な大登攀が、どうしたわけか、日本登山史には抹殺同様に扱われている。世にも不思議な物語である。登山界の寡頭政治の結果であろう。明治以降山の世界は、一握りのエリートを自称する人びとの手に牛耳られてきた。彼らは仲間内や彼らの息がかかった登山以外は認めがらなかった。……彼らは登山の門戸が広く開けることに歯止めをかけたかった。こんな歪曲は今もなお根強く尾を曳いている」と、当時の登山界に痛烈な批判を加えている。

筆者の見解は、まず、伊藤孝一は自身の山行記録を報告・発表しないことが登山関係者に正しく評価されない大きな要因であると捉えている。伊藤孝一以外の方が『山岳』第17年第3号の雑報欄、あるいは雑誌『山』第162号に若干載せている程度で、伊藤自身の山行発表は全くない。この状態では、どのような山行であろうと評価することができない。

伊藤孝一の登山は、費用をかけ小屋まで作るという登山であったので、大名旅行といわれる面もあろう。アルピニズム論が日本に導入されたばかりの頃ではあるが、伊藤はアンチ・アルピニズムでもない。

他人によって発表された厳冬期の上ノ岳や薬師岳の初登頂の日記の文面は、困難な厳冬期を選び高みの初登頂を狙うパイオニア・ワークそのものである。しかし、伊藤の登山はパイオニア・ワークという概念よりも、夢を安全、確実に成し遂げる自己実現のための一つの方法であった、と筆者は受け止めている。したがって、日本の登山史の1頁を飾るという意識は薄かったと考える。

### (3) 山の盟友

有峰の狛犬8体を一括購入したという伊藤孝一と赤沼千尋に百瀬慎太郎を加えた山の盟友関係を明らかにするが、この項は立山博物館図録『山嶽活寫』に負うところが多い。

まず、3人の親交が一層深まったと考えられる1922（大正11）年の年齢は、伊藤29歳、百瀬29歳、赤沼25歳であった。

伊藤孝一（1892・明治25年4月14日－1954・昭和29年4月17日 62歳）は、名古屋の京屋吉兵衛の7代目を襲名した。伊藤家は代々尾張藩徳川家の御用商人を務め、問屋業、両替商などを掌握して莫大な資産を築いた家である。そこで伊藤殖産合名会社を興して伊藤孝一が2代目となる。しかし、伊藤は事業には取り立てて関与する必要がなく、仕事よりもむしろ多彩な趣味に没頭するが、それは自動車・釣り・狩猟・植物・日本画・仏教美術・江戸文学・写真など多彩だった。そして狩猟を楽しむために山へ入り、それがキッカケで大正初期に登山が趣味の一つに加わる。

伊藤の趣味の一つである古典文学のコレクション「甘露堂文庫」は、安田財閥のコレクションと双壁を成すとまで謳われ、現在その主体部120点278冊は國學院大學図書館と蓬左文庫内の尾崎文庫に収蔵されているが、これは日本古典文学の研究においては重要資料の一つといわれている。

1931（昭和6）年に国と係争中だった税金問題で敗訴し、伊藤の経営していた伊藤殖産は破産の憂き目を見る。後に東京三鷹で4女の都留子にみとられて死去、享年62歳。

伊藤の登山関連活動の一部に、山岳映画の輸入公開、日本山岳会への資金援助などがあつた。ただし、当時の登山家の中では山行は極めて少ない。

百瀬慎太郎（1892・明治25年12月10日－1949・昭



和24年3月5日 56歳)は、信濃大町の旅館・對山館を営み、明治30(1897)年代後半からは登山者の定宿として評価が高まり、百瀬は多くの登山家・歌人と知己の間柄となる。若くして山の魅力を知り、旧制大町中学在学中、17歳に満たない1909(明治42)年8月、日本山岳会へ入会(会員章番号215番)、1940(昭和15)年ごろ退会。

1917(大正6)年6月、大町登山案内者組合を結成する。1917(大正6)年夏、大沢石室を造り、1925(大正14)年、木造の大沢小屋を建てて昭和初期まで並存した。

針ノ木小屋を1930(昭和5)年7月に竣工し、登山の発展とその安全に尽力した。また百瀬は若山牧水を兄のように慕った歌人であり、その平明な身辺描写は牧水の歌風と相響き合うものを有している。

スキーでは、1929(昭和4)年12月、大町スキー倶楽部が創設され初代会長となり、翌年大町の東山スキー場を開拓する。1947(昭和22)年、日本山岳会信濃支部設立に尽力。

慎太郎は晩年の1948(昭和23)年、『山々谷々』にエッセー「針ノ木峠雑談」を載せ、そこに「心の拠り所は山への思慕であり、山への憧憬を有つ人々への懐かしさである」ともいい、有名な言葉“山を想へば 人恋し 人を想へば 山恋し”があり「童謡ならぬ老謡を口吟(くちずさ)みながら、我ながらいつまでも抜けきらない老センチメンタリストを自分に発見するのである」と語っている。

家業の對山館は1943(昭和18)年6月、約50年の幕を閉じた。戦時体制強化の中で軍事工場となった昭和電工の寮となり、戦後は個人の医院となる。百瀬家は近所の借家住まい。

大町山岳会は1953(昭和28)年8月、大沢小屋前の大岩に百瀬慎太郎の銅板レリーフをはめ込み、1957(昭和32)年、「慎太郎を偲ぶ祭」を挙げる。その翌年から「慎太郎祭」として毎年6月、第1日曜日に開催され、第60回が2017(平成29)年6月4日、大町観光協会によって挙行された。

赤沼千尋(1896・明治29年4月27日-1979・昭和54年12月 83歳)に関しては、他の項に主として文筆面の功績を記述しており、ここでは要点のみ取り上げる。

赤沼家は天蚕(てんさん・ヤママユ)の飼育と製糸を家業とする豪農で、「世界一」なる商標を有し

ていた。学芸を重んじる家風があり、千尋も文筆に堪能であった。

赤沼も百瀬と同じで、若くして山の魅力にはまり、1919(大正8)年6月、有明口登山案内者組合設立、1921(大正10)年7月、北アルプスの燕岳(つばくろだけ)頂上近くに、「燕の小屋」(現・燕山荘)を創設。同時に同年、穂苅三寿雄と共同で大槍小屋(現・ヒュッテ大槍)を創設、後に合戦小屋購入など山荘の経営管理に専念する。

その間の1920(大正9)年2月、日本山岳会入会(会員章番号721番)、1940(昭和15)年頃退会。

伊藤孝一、百瀬慎太郎、赤沼千尋は、登山とスキーを通じて出会い親交を深めた。この山の盟友は、山友であるとともに文学などに心酔した多趣味な仲間でもあった。そして3人の友情は生涯を通じて続く。

『信濃』第53巻第10号(2001・平成13年10月、信濃史学会刊)に「大正十一年の冬(注・大正12年1月3~9日を指すようである)、営林署の役人和田宗治がスキーの達人(注・富士山をスキーを利用した初登頂者の一人)で、彼を講師としてスキー講習会を開いた。参加者には百瀬慎太郎、赤沼千尋、伊藤孝一などがいる」とある。ただし、「百瀬慎太郎が営林署の和田宗治を講師として大町の東山乗越でスキー講習会を開催。伊藤、赤沼参加」と記された文献もある。

筆者はこのスキー講習会から3人が腹心の友になったと受け止めている。この講習会の宿は對山館であり、3人の炬燵談義から「雪の針ノ木峠越え」と、その山行をくまなく撮影するという破天荒な計画が生まれている。

### 3. 参考文献・資料の吟味

「1の(5)購入者・購入額」の記述内容および参考文献の事実と創作、つまり、文学作品の真実と虚構について吟味する。

#### (1) 主として狛犬8体購入の一文

今まで取り上げた文献・資料の一部分と重複するところがある。ただし、本項の記述が原本であり、「1の(5)購入者・購入額」を裏付けるものである。

狛犬8体の購入については、発表した人によって購入者が異なる。そこで購入した事象を文献・資料



などで発表した順、つまり、事象の発生時点ではなくそれが公になった順に、発表内容を検証する。

引用文は狛犬購入部分以外に、狛犬に関連する主要なものの記述も取り上げる。

【1】伊藤孝一の山岳関連新聞記事切抜帖 狛犬関連記事は1923（大正12）年8月8日

切抜帖の一部である狛犬関連記事には、掲載新聞名および掲載日の記録はないが、記事の内容と関連資料から1923（大正12）年8月8日の記事で、朝日新聞に掲載されたものと推定される。この記事が有峰狛犬にかかわる史実の原点であり、ここに狛犬にかかわる記事のすべてを載せる。

（8体の写真） 飛越国境有峰の狗犬

（見出し） 平家の落武者連が

野猪調伏のために祀った狗犬

飛越国境の奇しき伝説

（本文） 飛越国境有峰部落民に崇敬されてゐた野猪調伏の狗犬（木造）八箇は今回全部山岳研究家伊藤孝一氏の所有に帰することゝなつた

狗犬の作製年代並に執刀者等については全然拠るべき正確な根拠もなく且つ通称狗犬と唱へてゐるが八箇の像形が孰れも異つた種類のもので何物の像形であるかも未だ判然とされてゐない、小島烏水氏の日本アルプスにも単に部落の口碑に上つてゐる一部分を引用して若干の説明を与へてゐるに過ぎない

伝説によると七百余年前源平の戦ひに敗れた平家の落武者等即ち有峰の祖先等が同地へ逃込んだところ原野とはいひ乍ら極めて険峻な深山幽谷に取囲まれ亡命者の隠れ場所には実に地の利を得た処だつたので此処に生活の本拠を置くとした、然るに同地一帯は当時野猪の群棲地であつたため絶はず群猪の襲来を受け折角の農作物を片つ端から荒され到底永住の地とすることが出来ないと知つたが、何分落人の身の何処に便る処もないのでこゝに一策を案じ野猪調伏のために八箇の木造狗犬を作り社殿を建立して只管野猪の退散を祈願した、ところが忽ちにして野猪は漸時退散して再びその将来に逢ふことがなかつたといふ

それ以来有峰部落の崇敬一方ならず明治維新の頃までは年一回の祭典には孰れも祖先伝来の甲冑に身を堅め壮麗な儀式のもとに一同社殿地

下室に於て礼拝してゐたものである。而して今日想像されてゐる処では作製年代は優に七百年以上は経過してをり執刀者も当時の落武者等が協力して造り上げたものだらうといふ、伊藤氏が之を手に入れるに至つた動機は氏も予て有峰部落には相当年代を経た狗犬が蔵せられてゐることは知つてゐたのだが今回遇々本社と、もに本年十一月から約五箇月間の予定で北日本アルプス縦走の計画を樹てその根拠地選定のため同部落に入り込んだところ、同部落貫流の和田川に県営水電が補給水として大野水□□□の計画があつて若しこれが実現すれば現在安置されてゐる社殿付近に水底深く葬られることゝなるので部落民等も狗犬の処置について非常に憂慮してゐた折柄だつたので買取の交渉も直ちに進んで一箇□円乃至三百円で全部を買受けることゝなつたのである

伊藤氏は近々上京して鑑定を乞ふた後博物館か又は菩提寺へ納める意向である

この記事のあとに、伊藤孝一一行の有峰から薬師岳・槍ヶ岳を経て8月9日か10日頃、燕岳へ到着し、有明へ下山予定であることとその撮影の記事あり。

★コメント：「伊藤孝一の山岳関連新聞記事切抜帖」は、立山博物館企画展「山嶽活寫」で展示され、その後、立山博物館に常設展示されている。

記事の中に「伝説によると七百余年前源平の戦ひに敗れた平家の落武者等即ち有峰の祖先等が同地へ逃込んだ」とあるが、『越中国誌』は、平家の落人と伝伝すれども左にあらず、大永亨禄の頃、中地山村に河上中務丞と云越将あり、上杉の乱入に煙城の時河上の家士潜避すると思わる。……（注・その根拠が書かれている）平家に係る書なし、と明快に断定し、中地山落城の落武者の隠棲した集落とするものもある」（『有峰の記憶』より）とあり、この説が現在では定説になっている。

また「伊藤氏が之を手に入れるに至つた動機は氏も予て有峰部落には相当年代を経た狗犬が蔵せられてゐることは知つてゐたのだが」とあるが、伊藤は日本山岳会の特別会員（1916・大正5年7月、弟・鎮之助と共に入会、会員章番号は弟が480番、孝一は481番。ともに多額の寄付によって特別会員）であつたので、『山岳』第5年第1

号（1910・明治43年3月刊）の辻本満丸執筆「越中薬師ヶ岳及上ノ岳」と題する登山記は、当然読んでいたと推測される。そこに載っている有峰や狛犬の写真と本文の記述によって、有峰の様子や狛犬8体のことはあらかじめ知悉していたことを記事は述べている。

【2】『山啄木鳥（やまげら）』 赤沼千尋著・伊藤孝一編 神子島正雄印刷・硯友社発行 孔版印刷和綴冊本・私家版 1950（昭和25）年8月1日編輯着手 同年10月15日製本完成 30部限定制作

筆者は本書未見。後述する【5】の『山の天辺』に「山けら（再録）」として掲載されており、記述内容は『山の天辺』を参照願いたい。

★コメント：この著書に問題となる記述があり、予め問題点を明らかにする。著書の「あとがき」は、伊藤孝一が「昭和二十五年九月二十六日、中房谷一ノ瀬の山居にて」（注・山居とは長野県有明の茶屋を購入した自宅。冬以外の時期に居住）書いている。それには狛犬購入の問題点である購入者や購入金額、購入直後の搬送先については全く触れていない。『山啄木鳥』は赤沼千尋の随筆集とはいえ赤沼が購入者のような文章で、購入したあと「私（注・有明の赤沼家）の家へ送り込んだ」と記している。伊藤自身が狛犬の購入者で名古屋の自宅へ持ち帰っているのだから「あとがき」で何らかの見解を示すべきであろう。何の指摘もないので、購入者は伊藤であるのか赤沼か、購入後の搬送先はどちらであるのか、読者・関係者を惑わす要因の一つになった。

【3】『木の民芸』 池田三四郎著 1972（昭和47）年7月刊

著書の「アルプスの怪像」と題するなかに、こう記している。

この写真（注・有峰狛犬の写真）に見られるような、山の中でつくられた木像ができたころの自然と人間は、なにか一つのもので、人間は自然の一部として、ただ自然の息吹きを身に受けて、自然の命のままにつくらされたという感じで、その姿は怪奇であっても自然である。

ほんとうの昔からの民芸というものは、このように自然と人間との合作品ともいえるべきもので、人間だけの考えや企てだけではない。……おもしろくつくり出してやろうとか、奇抜さで

人を驚かしてやろうなどとする近ごろの意識とは、およそかけ離れた自然の霊気とでもいうようなものが、人間の手を借りて出現したといってもよいであろう。……その形と容貌のなかには、世の常ならぬ妖気と邪気が入り交じって、常識の世界では考えられぬ自由さのなかで、しかもでたらめでなく、実は収穫を害するものから譲ってもらいたい敬虔な祈りがこめられて、神社に奉納されたものであった。

とあり、制作時代についても

まして人里を遠く離れたアルプスの山中のことであってみれば、時代の趨勢などが定式化されるわけではない。たとえば江戸時代（注・当時鑑定の専門家は江戸中期ごろ製作されたとしている）であっても、住んでいた人の感覚や生活環境は室町、鎌倉とも大差なく思われるからである。

江戸中期の生活環境は、室町・鎌倉期と大差ない、と言い切っている。つづいて、

ある地方新聞の粗雑な写真版ではじめてこれを見たのである。しかし私はこの木彫の驚くべき自然さと、常識のらち外にある造形に心を打たれて、翌日早速、この像が飾られている松本市主催の山岳展（注・1957・昭和32年7月5日～11日）が開かれている旧松本博物館に出かけて行った。そしてはじめてこちらの像に身近に体面して、あらためてそのすばらしさに感激を新たにしたのである。

狛犬購入の経緯について、

岩段という所に、八〇歳の老夫婦を入れてわずか三組の人々が住んでいただけであった。……そこで老夫婦にはかって、焼酎一斗がめと、金一封を献じ、木彫を菰包みにして、強力にかつがせ、はるばる赤沼氏の実家のある安曇の有明村の土蔵に保管した。そして像にとってはそのまま土蔵の中で三〇年間の星霜が移るのである。

そして池田は著書『原点 民藝』において「怪獣木彫り」と題し、こう記している。

民藝品の持つ一種の美の深さの例を引いてみた。この像（注・ヌエ）の由来は『木の民芸』にも書いたが、八体の中でこの像が一番凄い。一種の妖気さえ覚える。名もなきアルプスの住

人が山中で彫った彫刻の原点である。グロテスクは一種の美の原点であるが、意識外から、例えば宗教的な世界と密接して、このような造型のデザインを生み出す人間の仕事の不思議さを感じる。この像を見て感覚的に直ぐ驚く人には、物の美の深さを体得できる世界に発展する素質があると思う。

★コメント：赤沼千尋著、随筆集『山啄木鳥』を読んで、赤沼の友人・池田が書いた一文であるが、創作である赤沼の随筆に、例えば「木彫を菰(こも。わらで粗く織ったむしろ)包みにして、強力(ごうりき)にかつがせ、はるばる赤沼氏の実家のある安曇の有明村の土蔵」と尾ひれが付いて、ますます事実とは隔たりがでている。

当書発行時点の著者・池田三四郎は、(株)松本民芸家具および(株)中央民芸の社長で、長野県民芸協会副会長、松本文化財審議委員、松本民芸館長を担っている。

著者の記述に共感できるところと、池田は狛犬の見方・感じ方に独特な視点があり、有峰狛犬8体を美の世界からも絶賛しているので引用が長くなった。

なお、引用していない一文に「檜を用材として」とあるが、檜はサルのみであり、「江戸時代であっても、住んでいた人の感覚や生活環境は室町、鎌倉とも大差なく思われる」とは400年も離れており極言であろう。「岩段」は場所と解釈しているが岩段家である。

【4】北日本新聞の全面広告 1974(昭和49)年8月24日刊

「1の(7)大山へ帰郷、文化財指定」の【1】で述べた有峰狛犬8体の返還運動の広告である。購入の経緯については、

大正十二年、長野県の燕山荘の主人・赤沼千尋さんが、冬の薬師岳登攀を計画し、映画班までくり出して総勢二十余人がベースキャンプ設定のため、有峰部落を訪れた。そのころすでに、有峰部落はダムの湖底となる運命にあり、滅亡の道をたどるばかりであった。……そこで、まだ故郷を捨て去り難く、有峰にとどまっていた老夫婦と相談し、焼酎一斗と金一封を献じて、ゆずり受けたという。

★コメント：この一文は、購入者を赤沼千尋として

いる。富山に本社のある北日本新聞をはじめ富山県民は、この時点では、赤沼の随筆『山啄木鳥』の記述を唯一の拠り所にしていたのであろう。狛犬購入時の朝日新聞(推定)(当項【1】参照)には、明確に伊藤孝一と載っているのに、調査不足のそしりを免れない。

【5】『山の天辺』赤沼千尋著 1975(昭和50)年10月刊

『山啄木鳥』に記載されている内容は、この『山の天辺』に「山けら(再録)」と題して「まへがき」から「あとがき」まで再録されている。

この随筆作品「山けら(再録)」の構成は、「まへがき」・12編・「あとがき」で、その1編の「有峰悲歌」に狛犬購入のいきさつがこう記されている。

吾々の心に深く止ったのは小島翁の説明にある東谷宮拝殿の八体の像であった。此の拝殿は薬師に登攀出来ない部落民が之を拝したのであるといひ、此処には鉄を磨いて作った古円鏡が数多く奉納されてゐた。既にダムの底となるべき運命の見離された神殿は、さなきだに淋しい秋の風に冷たく吹きさらされてゐた。吾々は其の社殿の椽上にあつてやる瀬なくしよんぼりと寄り合ふ木彫の姿に限りない愛情を覚えたのである。そこで老夫婦達に相談して焼酎一斗と金一封を献じ木彫を菰包みにして私の家へ送り込んだといふ次第である。

★コメント：筆者は著書『山啄木鳥』は未見であり、燕山荘経営2代目・赤沼千尋の長男である赤沼淳夫に質したところ、『山の天辺』には『山啄木鳥』の全文が再録されていると言う。赤沼淳夫は現在92歳(2017・平成29年現在)で山岳写真を得意とし、登山史の研究にも熱心に取り組んでいる人で、筆者とは登山史にかかわる情報の交換を行っていたことがあり拙著を提供している関係でもある。題名は『山啄木鳥』から「山けら(再録)」に変わっているように、25年間経過しているのに再録の表記が少々変わっていても内容は、原文どおり再録されていると判断する。

【6】『有峰と常願寺川』北陸電力(株)発行 1981(昭和56)年11月刊

文中「1. 有峰の歴史」の「鎌倉・室町時代」の項に、修復前のシシの阿形とヌエの吽形の写真

とその説明に「有峰の守り神・狛犬（シシとヌエ）」と題して、

昔、有峰の人たちは自らの生活を守るための救い手として8体の木彫動物像を作り、神社に奉獻していた。これらの狛犬は約50センチの像で、サル、シシ、クマ、ヌエがそれぞれ2体ずつあって、各1体は口を「ア」の状態に、他の1体は「ン」の状態にしている。8体の狛犬は有峰が湖底となることが決った後、大正12年に長野県人が譲り受け、昭和32年から松本市の日本民俗資料館に展示されている。

★コメント：この一文は、狛犬を「長野県人が譲り受け」と記されているが、北日本新聞の全面広告同様、調査不足のそしりを免れない。

【7】『雪嶺秘話 一伊藤孝一の生涯一』 瓜生卓造 著 1982（昭和57）年5月刊

文中「十二 真川入り」の中にこう記されている。

伊藤の道楽は山のなかにきても少しもおとろえない。彼は有峰に伝わる八つの木製の狛犬を買い取った。製作年代も製作者も不明だが、骨董では目利きの伊藤である。一目見て相当な値打、と踏んだ。有峰の狛犬は小島烏水の文にも語られている。……村人たちは八個の狛犬をつくり、詞を建てて納め、ひたすら野猪の退散を祈願した。霊験まことにあらたかで、野猪は年毎に減って、ついに被害を見なくなった、という。……明治の中ごろまでは狛犬祭りが賑わった。村民は武者姿に威儀を正して狛犬に詣でた。ダムが出来れば狛犬も社殿も埋没する。村人個人の所有にもできず、大切に保管しそうな買手もなかった。伊藤は八基全部を二千元で買い取った。その後狛犬は疎開荷物と一緒に赤沼家の納屋に預けられた。伊藤の没後、赤沼名儀で、松本の民俗資料館に収められた。

著書の「あとがき」に「赤沼さん御子息の淳夫さんにも有難い御協力をいただいた」と感謝の言葉が述べられている。

★コメント：本書は小説である。したがってノンフィクション作品とはいえ、理解を深めるために一部フィクションや書き換えと登山史上の誤りがみられる。例えば、購入価格は伊藤の日誌では465円とあるが、著者はその日誌を読んで確認していてもここでは8体で2000円としている。筆者の見解

は、現在に換算した額は2000円の方が現実的であると思う。

また、大山登山案内組合の宇治長次郎は、立山案内人組合の人と思い込んでいるようだ。「一目見て相当な値打、と踏んだ」とあるが、伊藤は金銭欲で購入したのではない。

【8】『黎明の北アルプス』 三井嘉雄著 1983（昭和58）年7月刊

文中「薬師岳への奉納剣」と題する中に

有峰では薬師岳に登れない村人は、東谷宮拝殿に祈りを捧げたものである。そこには八体の狛犬を模した木彫があったが、ダムに沈む運命にあったので、赤沼千尋はまだ有峰に残っていた老夫婦に頼んで、焼酎一斗と金一封を献じてその像を譲り受けた。

現在、松本民俗資料館に展示されている。

★コメント：三井嘉雄は赤沼千尋と同じ長野県の人で、筆者とは日本山岳会百年史の編纂で、ともに山書研究に勤しんだ間柄である。彼は真摯な態度で研究を重ね、一つの事象を複数の文献で確かめるタイプであった。したがって、赤沼千尋著『山啄木鳥』や『山の天辺』以外に、赤沼千尋は文筆堪能であり、三井は赤沼が書いた有峰狛犬にかかわるエッセーなどを参考にしていると思われる。三井は現在山書研究活動から遠ざかり確かめることができない。

【9】『大山の歴史』 大山町編 1990（平成2）年3月刊

「大山の文学」「二 紀行文・随筆」の「有峰悲歌」の説明として

大正十二年（一九二三）に長野県燕山荘主の赤沼千尋が有峰村民から買いとり、のちに松本市立博物館に寄贈、現在同館に保管展示されている。「有峰悲歌」は、有峰のこま犬売買にまつわる赤沼千尋の回顧の一文である。

★コメント：この一文も調査不足のそしりを免れない。『大山の歴史』発行以前に、大山町史編纂委員会編集による『大山町史』（1964・昭和39年11月、大山町役場刊）が発行されている。それには有峰の狛犬にかかわる写真や説明文などの記述はない。「有峰の発生と戸数」の項に「同村東谷宮の蔵品で、後に松本博物館に移された木造の狛犬四躯とか、……、一応のメドをこのあたりに求め

たいと思う」と記されているが、この一文の記述目的は有峰集落成立の一つの材料にしている記述である。

【10】『山を撮る』 富山県〔立山博物館〕特別企画展図録 1998（平成10）年7月刊

山岳写真家9名を取り上げ、その一人が伊藤孝一である。辻本満丸の節に有峰の狛犬8体がカラーで2頁にわたって掲載されており、図録の写真のほとんどはモノクロームであるので狛犬はひととき目立つ写真である。

狛犬8体の写真の説明に

大正12年に伊藤孝一が電源開発のために廃絶した有峰から購入する。民俗資料としての重要性もさることながら、山へカメラを向けた人たちが山中のいかなる事象に興味を抱いたかを示す貴重な資料のひとつでもある。

とあり、「伊藤孝一」の節では

1923・24（大正12・13）年の二つの山行に、その成果が結実する。友人とはかり、破格の規模で敢行された北アルプス積雪期登山は、35mm映画と写真によって全容が克明に記録された。前者「雪の立山・針ノ木越え」の映像記録は、伊藤自らの手で映画作品にまとめられ、当時、日本各地で上映されて大好評を博した。夏の偵察山行では、廃絶した有峰から狛犬8体を購入し、これを散逸から救っている。

★コメント：展示の中に「伊藤孝一が山行を記録したノート」があり、その中の狛犬購入にかかわる部分を大山町歴史民俗研究会参与の前田英雄が写し取り、後述する『大山の歴史と民俗』第3号および『有峰の記憶』に発表した。

【11】『大山の歴史と民俗』第3号 大山町歴史民俗研究会 2000（平成12）年2月刊

この文献での記述とコメントは次項の「3の（2）参考文献・資料の事実と創作」で述べる。

【12】『岳の道標（みちしるべ）』 有明登山案内人組合八十周年記念誌編集委員会 2001（平成13）年1月

燕山荘相談役・赤沼淳夫は「有明登山案内人組合の今昔」と題し、有峰の狛犬および関連事項をこう述べている。

悪天候を予想し、真川、上ノ岳、黒部五郎乗越などコース中間となる場所に各山小屋を建

て、それぞれ小屋を撮影のベースにした。これらの準備と小屋建設の費用として、伊藤さんは芦崎寺の総代、佐伯静に二十万円（現在の二億円以上に相当）手渡したという。……三万五千フィートは映画時間にして約六時間に相当する。今回の薬師、槍ヶ岳縦走の撮影に投じた費用は四十万円を下らないという。ちなみに三十坪の家が千円で建てられた時代での四十万円はいかに莫大な金額であったかがわかる。……しかしこれだけ莫大な費用を投入して作ったフィルムも、二・三年後にはお蔵入りした。

その後このフィルムは久しく世に問われる事も無く八体の木彫とともに戦渦を逃れ疎開されて、我が家の土蔵に時代とともに忘れ去られ長い事眠っていた。……昭和五十四年十月三日、「雪の立山・針ノ木越え」のフィルムが別の土蔵の奥を片付けていた妻によって計らずも発見され、その際父は涙を流して喜んだ。

とあり、あえて「◆参考資料『八体の木彫』」と題して次の一文を特別に記している。

有峰村の氏神、東谷宮拝殿の境内に安置されていた木彫動物（狛犬）で高さ五十センチ。当時、有峰部落はダム湖に沈む運命にあった。村人達は補償金を受取って村を去ったのであるが、未だ去り難い人達も幾人か居て、伊藤さんは彼らに金一封と四斗樽を与えて譲り受けてあったものを、戦時中、伊藤家の荷物と共にフィルムと一緒に疎開し、戦後この二点（フィルムと木彫）を残して引き揚げた。その後我が家の土蔵に忘れられていたが、昭和三十二年十二月、父はこの木彫を松本市民族資料館に寄贈した。この木彫は600～800年前のものと云われ、日本民俗学の泰斗柳宗悦はここを訪れた際、農民美術の傑作として高く評価した。昨年、富山県大山町にある立山博物館では何としても手許に置きたいと富山県知事を通じて松本市の有賀市長に渡りをつけ、返還が実現した。平成十二年七月一日、返還オープニングセレモニーが民俗資料館で行われ、大山町からは町長、議長、副議長、収入役、教育長など要職十五名が参列し、松本市でも市長、助役、議長ほか多数が列席し、私も伊藤都留子（注・伊藤孝一の4女）さんと共に招待された。式は厳粛のうちにも友好裡に執

り行われ、かくして狛犬達は故郷に帰ったのである。

★コメント：赤沼千尋の長男・淳夫の執筆であるが、記述内容が問題となっている父・赤沼千尋の著『木啄木鳥』に関係なく、狛犬は伊藤孝一が購入し、松本市立博物館（赤沼は松本市民族資料館と表記している）へ寄贈するまでの戦中・戦後は、赤沼家の土蔵に置かれていたことを述べている。つまり、赤沼千尋が購入し有明の赤沼の家に送ったという随筆の記述を否定している。立山博物館は大山町にあるなどの間違いも見られるが、ここに記した赤沼淳夫は、事実に沿ってたんたと述べ、創作や虚構を排除した記述である。

【13】「英男の『水晶山探検記』」 奥原教永著資料 2002（平成14）年5月

探検記は1923（大正12）年8月の記録で、奥原英男、教永の義兄・斉藤元正、ガイド・中谷喜太郎、荷担ぎ1人が上高地～槍ヶ岳～三俣蓮華岳～ワリモ岳～雲ノ平～薬師沢～上ノ岳～有峰～大多和峠～土のコースを踏破し高山へ出た登山記。1923（大正12）年8月25日の記録に狛犬購入と有峰集落の一部をこう表わしている。

西谷との境には低い尾根が延びていて、その東谷側に山の神が盛時の面影も無く僅かの住民によってささやかに祭られていた。そこに供えられていた筈の木造の狛犬八体が既に松本へ売られていたとは英男も元正も知らなかった。実は赤沼氏が、ダムによって村や神社と共に水没する運命にある狛犬があまりにも哀れで、岩段の老夫婦と相談して焼酎一斗と金一封で譲受け、菰包みにして松本へ送ったという後だった。（現在この狛犬は松本市博物館に収蔵されている）

★コメント：この資料は、著書ではなく上高地西糸屋経営の奥原教永が父・英男の日記を軸に、参考文献によって補足しまとめあげたもので、『太郎平小屋 30周年を迎えて』も参考文献としている。

筆者は2017（平成29）年8月、奥原教永に改めて狛犬購入の記述について電話で質したところ、「親父英男の日記をもとに赤沼千尋の『山の天辺』に書いてあることをまとめた」という。そこで筆者は「狛犬を買ったのは赤沼千尋ではなく伊藤孝一であり、長野県では大町山岳博物館の資料にも

伊藤孝一が買ったという記述がある」と話したところ驚きの言葉を発していた。

【14】「山岳映画誕生」 市立大町山岳博物館企画展資料 2004（平成16）年10月

大町山岳博物館が2004（平成16）年10月2日～12月5日に開催した企画展「山岳映画誕生」の資料である。

当資料のタイトルは「伊藤孝一没後50年 山岳映画誕生 大正末、雪の絶嶺にカメラを回す」と題し、企画展は立山博物館との共同企画による開催である。

この資料での記述とコメントは、次項の「3の（2）参考文献・資料の事実と創作」で述べる。

【15】『山嶽活寫』 富山県〔立山博物館〕企画展図録 2005（平成17）年3月刊

当図録のタイトルは「山岳映画の先駆者、伊藤孝一没後五〇年 -山嶽活寫- 大正末、雪の絶嶺にカメラを廻す」（2004・平成16年7月24日～8月29日）と題するもので、伊藤孝一のことについてくわしく記されている。

伊藤孝一の4女伊藤都留子が「父、伊藤孝一の足跡をたづねて 上ノ岳へ」と題して次のように綴っている。

「昨日吉井さんの案内で見た大山町歴史民俗資料館の狛犬が思い出される。これ等が湖底に沈むのを惜しんで父が買い取り、名古屋に持ち帰ったもので、子供の頃、蔵の地下室に並んでいて気味悪く思ったものだ。……この狛犬は私どもが信州へ疎開した折、有明村の赤沼家の納屋に預けられ、後、赤沼さんの名義で松本の城内にある博物館に寄贈された。現在、富山県の大山町に移管されることになったものと聞いたが、久しぶりに対面した狛犬は意外に小さく、可愛らしく思えたのは不思議だった」

★コメント：随筆の虚構については、次項の「3の（2）参考文献・資料の事実と創作」で述べる。資料の「校訂例言」によると原文をかなり読みやすく解りよい文章に置き換えているようだ。ただし「固有名詞は原表記のまま、敢えて統一を図らなかった」とあるが、例えば、藤橋を「渡りきった千寿ヶ原からは」とあり、千寿ヶ原と称する地名は1954（昭和29）年に立山黒部アルペンルートを開発した佐伯宗義の意向によって改名されたと

言われているが、それ以前は「千丈ヶ原」と称し、大正期には名が付いていなかった。このように固有名詞も一部置き換えられており、それによって大正期ではなじまない地名であったり誤認が生ずる恐れがある。

また、伊藤が上ノ岳小屋の窓から笠ヶ岳方面を撮った写真が決め手になって、上ノ岳小屋跡地を確定したとしているが、昭和初期には「上ノ岳小屋」としてきちんと地図に載っていた。筆者は内務省地理調査所（現・国土地理院）の昭和21年12月発行5万分1地形図「槍ヶ嶽」を一時使っていたが、それには現在の標高2576m地点に「上ノ岳小屋」と載っていた。ただし、小屋は1932（昭和7）年に太郎兵衛平へ移動していたが、戦後まもなくの発行であり、また、大山村からの地名調書の提出が遅れたので載っていたのであろう。

【16】『有峰の記憶』 前田英雄編 2009（平成21）年8月刊

執筆者は「【11】『大山の歴史と民俗』第3号」と同じ前田英雄で、記述内容もほぼ同じである。「3の（2）参考文献・資料の事実と創作」と一部重複するが次を引く。

ところが平成十年（一九九八）、立山博物館特別展『山を撮る』で伊藤孝一の「山行記録ノート」の一部が公開された。その内容は驚くべきものであった。と記し、前述の「【11】『大山の歴史と民俗』」に載せた内容が書かれている。つづいて、

今まで赤沼千尋の本の記述を人々は信じ、あちこちの本にも引用されてきたが、事実は違っていた。いずれにしても、狛犬は赤沼家で保管され、昭和三十二年（一九五七）、松本市立博物館に寄贈された。伊藤孝一のお蔭で八体の狛犬は散逸せず湖底にも沈まずに保存されたのである。

★コメント：【11】『大山の歴史と民俗』に記されている主旨と同じ主張であるが、「赤沼がなぜこのような嘘を書いたのかという憤りさえ感じたのである」の一文は、ここでは「事実は違っていた」と記している。前者は記述と事実が異なっていることを発見した直後であり、相当憤慨していた時であろうが、研究会の会報であり、会員に前田自身の気持を率直に訴えている表現で、むしろ本心

を吐露した一文である。しかし、後者は書籍であり、いろんな人が読むことになるので慎重に言葉を選んだのであろう。

以上、16点を取り上げたが、伊藤孝一の生涯のうち、特に「雪の薬師、槍越え」のフィルム発見に至る経緯については、日本山岳会発行『山岳』第68年（1974・昭和49年4月刊）に「伊藤孝一氏の足跡」と題して名古屋の新聞記者・上田竹三が書いており参考になる。

## （2）参考文献・資料の事実と創作

有峰狛犬8体にかかわる文献・資料のうち、狛犬8体の購入者に関しては、文学の一般論では解けない複雑さがある。それは引用する原本が事実と異なることが書かれており、その上、孫引きした一文に感想を加えている文があり、ますます事実との乖離がみられるからである。

言語表現による文学作品のうち、「小説」は、作者の奔放な構想力によって構築した世界を、それが創作・虚構であっても強い感動や迫真性をもって読者に訴えようとする言語表現であり、「随筆など」は、書き手の体験や見聞を題材に、思うままに感想をも交えて書き綴った言語表現である。

しかし、随筆などで虚構が許されるのは感想・感情部分の表現のみである。つまり、随筆などは虚構を前提としたものではない。人間の物事についての思考や感性は、人によって異なり、それに伴う表現が事実とのズレを生じることがある。ただし、事実そのものを押し曲げることは出来ない、と筆者は認識している。

前項の【14】で取り上げた大町山岳博物館の企画展資料「山岳映画誕生」には次の記述がある。

資料の「4. 伊藤孝一は、何故、山の映画を撮ったか」の中で、

もとより、赤沼千尋の「やまけら」も伊藤孝一の「狸囃子」も、その記述すべてを事実と見なし、無批判に「史料」として扱うことは慎まねばならぬ。記述内容の事実と否とはさておき、これらが随筆という「作品」である以上、ここでは、虚構が「作品」を生み出す重要な仕掛けとなるのは明白なことだからである。伊藤も赤沼も、このことは良く心得ていた。……。

だがしかし、虚構を必要としない書簡類の記述などと整合性を確認できるに到った現在、この一文の意味は、文字通り、素直に読まれるべきであると判断せざるを得ない。

展示している『山啄木鳥』の説明に

狛犬が有峰を離れる経緯について、後年、これに関わる者たちを惑わすことになる随筆作品「有峯悲歌」を収める。この随筆作品に依れば、赤沼が「焼酎一斗と金一封を献じ」て狛犬を譲り受けたことになっている。しかし実際は、この随筆集を編集した伊藤が相当の高額で狛犬を購入している。

展示「有峰狛犬」の説明では

有峰の解村後、これらの狛犬は現地に放置されたままとなっていた。そのうち状態の良いもののみを富山の銀行家が購入する予定のところ、その価値を知っていた伊藤孝一は、交渉によって全8体を購入する。伊藤は狛犬の散逸を危惧した。遺族の証言に依れば、生前、やがては富山へ帰るべきものだ、と語っていたという。

ここでは狛犬8体を購入したのは、赤沼千尋の随筆集に記されている赤沼ではなく、伊藤孝一であることを明確に告げている。なお、企画展開催協力者の一人に赤沼千尋の長男・燕山荘経営2代目赤沼淳夫が記されている。

この記述のうち「これらが随筆という〔作品〕である以上、そこでは、虚構が〔作品〕を生み出す重要な仕掛けとなるのは明白なことだからである」と書かれているが、随筆には感想・感情の表現ではなく、事実の記述に虚構が許されるというのであろうか。

前項の【15】で取り上げた立山博物館の特別企画展図録『山嶽活寫』の記述に次の一文がある。

「資料4〔あとがき〕(伊藤孝一の『山啄木鳥』の「あとがき」)の説明に、

巻頭口絵に「越中有峯村社宝前狛犬」の名称記述を伴う有峰狛犬8体のモノクローム写真が貼られ、狛犬が有峰を離れる経緯について、後年これに関わる者たちを惑わした随筆「有峯悲歌」を収める。この随筆で赤沼が「焼酎一斗と金一封を献じ」て譲り受けたことになっている狛犬は、実際には伊藤が相当の高額で購入したものである。作品である以上、当然のこととし

て虚構を含む「随筆」を「史料」として扱うときの陥穽(かんせい)がここにある。

と書かれている。つまり、『山啄木鳥』の「有峯悲歌」に記されている狛犬8体の購入については、「虚構を含む随筆」を「史料」としていることは、人を陥れるはかりごとにはまった、という見解であろうか。

一方、大山町歴史民俗研究会会員・前田英雄は、「有峰の狛犬と懸仏」と題し、「1. 有峰の狛犬の流転」の中に、

「東谷宮」にあった狛犬は長野県燕山荘主人赤沼千尋に買い取られたということになっていた。この狛犬の記述について最も古いものは日本山岳会誌「山岳五周年記念誌 明治42年」の辻本満丸の「越中薬師ヶ岳及上ノ岳」である。と記し、本稿「1の(2) 東谷宮社殿に置かれていた状態」に載せた辻本の文章が掲載されている。

つづいて「赤沼千尋があらわした〔有峰悲歌〕には」と前置きし、「3の(1)【5】の『山の天辺』」の一部を載せ、

ところが昨年(1998)の立山博物館特別展「山を撮る」で伊藤孝一の「山行記録ノート」の一部が公開展示された。その内容は驚くべきものであった。

と記し、「山行記録ノート」から写し取った内容を次のように記している。

有峰の狛犬の内最古の破損せぬ者二個が富山市の銀行家某に売約が成立しかかっていた。其の売買の値は不明だが、有峰全村民の入札により落札した。価が二個百廿円であったそうである。八個全部を当方に於いて求め度いと話の結果四百六十五円で買い受けることになって契約した。

とあり、つづいて怒りを込めた次の一文を載せている。

今まで赤沼千尋の本の記述を人々は信じ、あちこちの本にも引用されてきたのである。赤沼がなぜこのような嘘を書いたのかという憤りさえ感じたのである。特別展を担当した立山博物館吉井学芸員に尋ねると、伊藤家は破産し文化財の散逸を恐れ狛犬を赤沼に預けたのが真相らしい。その後赤沼家から松本市立博物館に寄贈された。伊藤孝一のお蔭で八体の狛犬は散逸



せず湖底にも沈まずに保存されたのである。預かった赤沼千尋にも功績がなかったとはいえないが刊行された図書に偽りの文章をのせたことに納得できない。

前田英雄が、大山町史編纂委員会委員として編集した大山町発行『大山の歴史』には、「大正十二年（一九二三）に長野県燕山荘主の赤沼千尋が有峰村民から買いとり」とある。『山の天辺』の記述を事実としていたので、「憤りさえ感じた」のであろう。

前田英雄の正しい歴史を追求する態度には感服する。前田は狛犬にかかわる歴史を一部修正しなければならぬと判断したのであろう、立山博物館の学芸課主任専門員・吉井亮一は、「当時、前田さんが展示品を取り出し熱心にメモをとり撮影していた。他の見学者に迷惑がかかるといけないと思い、一応、展示品を所定のところに収めるよう話したが、必要個所のメモがすべて終わるまで作業を続けていた」と2017（平成29）年8月、筆者に話している。

この段階で狛犬購入額の事実が明らかになった。これまでの記述では、購入金額がまちまちであり、それらに示されていた金額とは異なっている。この伊藤孝一が日誌に記している金額は、他の記述よりも蓋然性が一番高いはずである。

ただし、大山町の『大山の歴史』発行以前に、少なくとも「伊藤孝一の新聞記事切抜帖」にある1923（大正12）年8月8日の朝日新聞と推定される記事や、瓜生卓造著『雪嶺秘話』（1982・昭和57年5月刊）に、伊藤孝一が購入したと記されている。特に後者は、本が発行される前には東京新聞出版局発行の山岳雑誌『岳人』に、1年半にわたって掲載しているので、登山愛好者を中心にかなり多くの人を読んでいて有峰狛犬8体の購入者は伊藤孝一であると認識している。したがって前田らの調査不足はまぬがれない。

この3者の見解をどのように解釈すればよいか。筆者は端的に、こう捉えている。文学作品のうち小説以外は、事実の表現に創作は入り込まないと認識しているので、随筆で事実を述べている部分は、史料と捉えてもよいと考える。ただし、書き手が事実を創作している場合は、随筆ではなく小説の分野に属することとなる。したがって3者のうち、大町山岳博物館と立山博物館の見解と筆者の見解が異なり、前田英雄が随筆に「赤沼がなぜこのような嘘を

書いたのか」と書いている心情は、当然でありよく理解できる。

随筆集『山啄木鳥』の「有峯悲歌」の記述について、もっと深く検討を加えるために、まず、有峰狛犬8体購入に関連して、伊藤孝一をとりまく主な背景を次のように整理した。

①1923（大正12）年の夏～秋

伊藤孝一は有峰村民から狛犬8体を465円で購入し、名古屋の自宅へ送った。

②1931（昭和6）年7月

伊藤は国と訴訟中だった税金問題で敗訴し、伊藤殖産合名会社は破産宣告する。

③1944（昭和19）年4月

伊藤は戦禍を逃れて家族とともに信州松本へ疎開した。その折りに狛犬8体を有明の赤沼千尋に預ける。

④1945（昭和20）年8月14日

伊藤は赤沼の斡旋により家族とともに有明へ転居。甲府が空襲に遭い、松本も危ないということから赤沼家と隣り合わせのところへ移るが翌日終戦となる。後に、伊藤は中房谷の一の瀬（現・長野県安曇野市穂高有明宮城）の茶屋を買い取って春から秋の住居とする。

⑤1950（昭和25）年10月15日

赤沼千尋著・伊藤孝一編輯『山啄木鳥』が発行され「有峯悲歌」が載る。この本は30部限定制作で赤沼千尋の周辺の人びとのおのみに知られる。狛犬購入の27年後に発行されたが、この時点では狛犬8体は赤沼が保管。

⑥1951（昭和26）年10月

伊藤は狛犬8体と「雪の立山、針ノ木越え」および「雪の薬師、槍越え」（2本とも編集後のタイトル）のフィルムを赤沼に預けたまま、東京三鷹へ家族とともに転居。

⑦1954（昭和29）年4月17日

伊藤孝一は波瀾に満ちた生涯を終える。

⑧1957（昭和32）年7月6日

赤沼千尋が狛犬8体を松本市立博物館へ寄贈する。

⑨1975（昭和50）年10月20日

赤沼千尋著『山の天辺』が東峰書房から発行され、その中に「山けら」を再録し、「有峯悲歌」が世

に広まる。

この経緯を辿りながら筆者の見解を次のように付け加える。

まず、「山けら（再録）」の「有峯悲歌」狛犬購入部分を再掲する。

忘れもしない大正十二年、名古屋の伊藤孝一と私は冬の薬師登攀を志し、此の拳を映画に収むべく、写真班を含め人夫等総勢二十名余りを引具して、一根拠地設定の為有峯部落を訪れた。……吾々は其の社殿の椽上にあつてやる瀬なくしょんぼりと寄り合ふ木彫の姿に限りない愛情を覚えたのである。そこで老夫婦に相談して焼酎一斗と金一封を献じ木彫を菰包みにして私の家へ送り込んだといふ次第である。

とある。この一文では買った人の名前を記していない。「伊藤孝一と赤沼」「写真班を含め人夫等総勢二十名余り」を「吾々」と表現し、その「吾々が」狛犬を購入しているが、著者は赤沼であり、「私の家へ送り込んだ」と書かれていることから、購入者は赤沼千尋と特定している。本を出版する時点では、狛犬8体を赤沼が預かっており、「私の家へ送り込んだ」と書いたのであろう。それは虚構ではあるが、この一文によって赤沼が購入したという真実味が印象づけられた。

筆者は「有峯悲歌」を文学作品として、より優れた作品へ高めようとする方策の一つとして、「赤沼購入」としたのであろうと受け止めている。構想力を駆使したフィクションではあるが、物語としては非常にスッキリする。また、本の編集は伊藤孝一であり、赤沼は伊藤家の伊藤殖産が裁判に敗訴となり、倒産したという複雑な経緯があるので、それらを覆い隠そうとして「赤沼購入」の筋書きにしたのではなかろうか、とも考えられる。

ただし、書き手が承知した虚構が含まれているので、この作品は随筆ではなく、小説に属するものである。つまり、優れた虚構性、意図された嘘が、事実を巧妙に覆い隠した場合、史料としては扱えない。

以上の経緯から、「有峯悲歌」には虚構があり、史料としては使うことができないまでも、有峯狛犬8体の奇怪な運命を描いたキッカケとして『山啄木鳥』は、大いに意義のある物語である。

## むすび

今回、有峯狛犬に取り組んだ筆者の本意は、博学的な伊藤孝一の目利きによって消滅あるいは散逸を免れた有峯狛犬8体は、歴史・民俗上あるいは芸術上価値の高いものと推測されるので、狛犬通称ヌエの木材伐採年代測定や制作者などの解明されていない事項を明らかにし、富山県あるいは国の有形民俗文化財に指定されることを願っているからに他ならない。

## 引用文献・資料（著作・制作別）

### 富山県関係者

- 有峯と常願寺川編集委員会（1981）：有峯と常願寺川、北陸電力(株).
- 広瀬誠（1977）：第四篇 飛越奥山の山岳信仰 薬師岳の信仰と有峯びと、山岳宗教史研究叢書10 白山・立山と北陸修験道、名著出版.
- 広瀬誠編（1991）：第二十七号 旧記 立山 中宮、越中 立山古記録、第三巻、立山開発鉄道(株).
- 北陸電力(株)（1987）：「有峯こまいぬの塔」について（除幕式びら）、北陸電力(株).
- 五十嶋一晃（2004）：岳は日に五たび色が変わる、太郎平小屋50周年記念誌別冊、太郎平小屋50周年記念誌編集委員会.
- 五十嶋一晃（2012）：越中 薬師岳登山史、五十嶋商事.
- 五十嶋一晃（2013）：立山ガイド史、五十嶋商事.
- 五十嶋一晃（2017）：立山ガイド史Ⅱ、五十嶋商事.
- 北日本新聞「ふるさと有峯を離れて五十余年。八匹の狛犬たちはいま何を思う」1974年8月24日.
- 大山町史編纂委員会（1964）：大山町史、大山町役場.
- 大山の歴史編集委員会（1990）：大山の歴史 資料編 大山の文学 紀行文・随筆「有峯（ママ）悲歌」（解説）、大山町.
- 前田英雄（2000）：有峯の狛犬と懸仏、大山の歴史と民俗、第3号、大山町歴史民俗研究会.
- 前田英雄編（2009）：有峯の記憶、桂書房.
- 竹中邦香（1983）：越中遊覧志「六 上新川郡 有峯」 広瀬誠校訂、言叢社.
- 富山県 [立山博物館] 編（1998）：山を撮る：特別企画展図録、富山県 [立山博物館].
- 富山県 [立山博物館]（2000）：雪の薬師、槍越え 伊藤孝一一行撮影による山岳映画、富山県 [立山

博物館].

富山県 [立山博物館] (2005): 山嶽活寫 企画展図録, 富山県 [立山博物館].

富山市大山歴史民俗資料館 (2005): 大山の先人を偲ぶ 図録, 富山市大山歴史民俗資料館.

富山市大山歴史民俗資料館 (2010): さまざまな狒犬の姿と形 企画展図録, 富山市大山歴史民俗資料館.

湯口康雄 (1973): 黒部雑記, 北日本出版.

### 長野県関係者

赤沼千尋 (1975): 山の天辺, 東峰書房.

赤沼淳夫 (2001): 有明登山案内人組合の今昔, 岳の道標, 有明登山案内人組合八十周年記念誌編集委員会.

はまみつを (1994): 黎明の北アルプス, 郷土出版社.

池田三四郎 (1972): 木の民芸, 文化出版.

池田三四郎 (1986): 原点民藝, 用美社.

石原きくよ (1993): 山を想えば人恋し, 塩原書店.

菊地俊朗 (2003): 北アルプス この百年, 文藝春秋.

三井嘉雄 (1983): 黎明の北アルプス, 岳書房.

百瀬慎太郎遺稿集刊行会 (1962): 山を想へば, 百瀬美江.

中村周一郎 (1995): 北アルプス開拓史, 郷土出版社.

奥原教永編 (2002): 英男の「水晶山探検記」, 私製.

市立大町山岳博物館 (2002): 對山館と百瀬慎太郎 企画展図録, 市立大町山岳博物館.

市立大町山岳博物館 (2004): 山岳映画誕生 企画展資料, 市立大町山岳博物館.

内山美紀 (2000): 資料はどこにあるべきかⅡ～さようなら、有峰の動物木彫たち, あなたと博物館, No.109, 松本市立博物館.

著者不明 (2001): 信濃, 第53巻, 第10号, 信濃史学会.

### 富山・長野県関係者以外

藤田信道 (1933): 積雪期登山, 朋文堂.

羽田栄治 (1998a): 厳冬の北アルプス横断 山岳映像に賭けた伊藤孝一の情熱 上, 岳人, 607号, 東京新聞出版局.

羽田栄治 (1998b): 厳冬の北アルプス横断 山岳映像に賭けた伊藤孝一の情熱 下, 岳人, 608号, 東京新聞出版局.

飯田辰彦 (1995): 有峰物語 「山の時間」を生きる日本人, NTT出版.

一戸直蔵・河東碧梧桐・長谷川如是閑 (1922): 日本アルプス縦断記, 大鏡閣.

加藤泰三 (1941): 霧の山稜, 朋文堂.

河東碧梧桐 (2006): 山岳行集 (「日本の山水」含), 河東碧梧桐全集, 第10巻, 文藝書房.

小島烏水 (1911): 日本北アルプス縦断記, 日本アルプス, 第2巻, 前川文榮閣.

窪田他吉郎 (1923): スキーで針の木山へ, Berg=Heil, 1号, 第四高等学校旅行部.

H・T (武田久吉と推測) (1917): 図書紹介『日本アルプス縦断記』, 山岳, 第11年第3号 (通巻33号), 日本山岳会.

辻本満丸 (1910): 越中薬師ヶ岳及上ノ岳, 山岳, 第5年第1号 (通巻13号), 日本山岳会.

新田次郎 (1977): 劔岳・点の記, 文藝春秋.

上田竹三 (1974): 伊藤孝一氏の足跡, 山岳, 第68年 (通巻127号), 日本山岳会.

瓜生卓造 (1979): 日本山岳文学史, 東京新聞出版局.

瓜生卓造 (1982): 雪嶺秘話, 東京新聞出版局.

山崎安治 (1986): 新稿 日本登山史, 白水社.

吉田精一 (1990): 随筆とは何か, 創拓社.

新聞名不明「山岳関連新聞記事」1923年8月8日付 (伊藤孝一の新聞記事切抜帖).